伊予路

No. 156

［令和２年３月］

愛媛県公民館連合会

表　紙　写　真

パワースポット「垣生（はぶ）山展望台」

垣生山は新居浜市の東部・海辺にある標高101ｍの小山で展望台から新居浜市の市街地域を望むことができます。更に美しい瀬戸内の海が眼下に広がり見ることができ、晴天の日には「しまなみ海道」まで眺望できる垣生校区のパワースポットです。４月には桜やチューリップが満開となり、訪れる登山者の目を楽しませてくれます。

約40年前、退職者を中心にボランティアグループ「よもだ会」を結成し展望台や山小屋を自作しました。現在も自治会はじめ地域の方々や学校・PTAなど校区一体となって、年２回遊歩道整備に汗を流し、維持管理しています。

垣生小児童によるチューリップの球根植えや全校児童による垣生山縦走オリエンテーリングなど児童が「元気で逞しく成長できる」場としてふるさと垣生山を活用しています。

皆さんも垣生のパワースポット「垣生山展望台」に登ってみませんか！

伊予路　156号

〈目　　次〉

◎　表紙写真　《パワースポット「垣生山展望台」》
◇「県内すべての公民館が主役です」……愛媛県公民館連合会　会長　重信　昭雄…2

《公民館運営審議会委員からの提言》
◇「運営審議会委員として思うこと」……上島町公民館運営審議会　委員　小澤　宏次…5
◇「公民館とわたし」……愛南町西海公民館運営審議会　委員　吉田　羊子…6

《きてみなはいや　おらが公民館》
◇「地域と連携のできる公民館活動」……四国中央市長津公民館　主事　續木　美紀…7
◇「二名地区夕涼み大会について」……久万高原町公民館二名分館　主事　中田　孝治…9

《愛媛県公友会について》……10

《つどう・まなぶ・むすぶ》
◇「子どもたちと防災
～つどう（60人）まなぶ（生き抜く知恵）むすぶ（角野の絆・助け合い）～」
……角野校区連合自治会総務部長　新居浜市立角野公民館運営審議会委員　品川　正…11
◇「地域ネットワークのハブ（HUB）」
……西予市田之筋公民館　田之筋緑の少年団　代表　中野　聡…12

《優良グループ紹介》
◇「みんなの協力を得てすすめる愛護班活動」
……南山崎校区愛護班連絡協議会　事務局　鶴岡　憲雄…14
◇「北灘よいとこｗａｙ」……宇和島市立北灘公民館　主事　川本　千鶴…16

《館長さん　こんにちは》
◇「今治市中央公民館　本宮　圭治　館長さんにご質問」
……質問者　今治市中央公民館　館長補佐　近藤　俊夫…18
◇「八幡浜市立白浜地区公民館　中島　和久　館長さんにご質問」
……質問者　八幡浜市立中央公民館　主事　菅　義則…19

《元気な主事さん》
◇「地域のぬくもりに支えられて」……西条市大保木公民館　主事　岩間　好美…20
◇「内子自治センター開館十五周年を迎えて」
……内子町立内子自治センター　主事補　池田　あかり…22

《郡市公連だより》
◇「若者世代の公民館への参画」……松山市公民館連絡協議会　事務局長　毛利　雄一朗…23
◇「町を越えての交流事業」……松野町吉野生地区公民館　主事　猿屋　洋一…25

《令和元年度愛媛県公民館研究大会》……26
《県公連だより》……52
《編 集 後 記》……54

県内すべての公民館が主役です

愛媛県公民館連合会　会長　重信昭雄

まずは、日頃より、愛媛県内各地において、地域課題や住民ニーズに即した、公民館活動を推進されている皆様に、心から敬意と感謝を申し上げます。

私は、現在、松山市小野公民館長、松山市公民館連絡協議会長も仰せつかっています。

近年、全国・中四国大会等において、都市化、少子高齢化、地域の教育力の低下、急激な情報化など、社会の課題が提起されています。

これらの課題解決にむけ、松山市教育委員会では、第四次まつやま教育プラン二十一に「人と人とが互いにつながり、支えあう地域社会づくりを進めていくためには、地域住民の学習活動の中心である公民館の活性化が重要です。」と明記されています。

この方針に沿い、今後も、市教育委員会と一体となり、時代の変化、地域の実態、住民ニーズに即した活動を展開していきたいと思っています。

松山市内に目を向けますと、都市化、高齢化が進む地区、過疎化が著しい地区があります。

松山市公民館連絡協議会では、このようなことを踏まえ、構成している四十一地区公民館それぞれが主役であるととらえ、地区公民館の活性化を支援していくことを役割にしています。

また、県公民館連合会としましても、公民館が持つ「つどう」「まなぶ」「むすぶ」という本来の機能を最大限に生かしつつ、「学びと活動」の好循環によって、地域課題を適切に解決できるよう、県内の公民館活動を側面から支援してまいりたいと考えています。

ここからは、小野公民館長としての思いを少し述べさせていただきます。

就任当初、「公民館は、人が集まって、運動会や文化祭をしている。」こんな認識でした。実際に関わって、感動を実感した行事を紹介させていただきます。

【子ども獅子舞大会】

獅子舞は小野地区に四百年以上続いている文化です。その担い手は小中学生。元気な舞。獅子に合わす太鼓のリズム。家族や指導者の応援。演技終了後、地域住民からの大きな拍手。演舞をした子どもたちの汗。誇らしげな笑顔。行事を実施して「良かった」と心から思いました。

※私が学んだこと

この子どもたちは明日の地域を支える貴重な人材。地域デビューの機会。みんなの拍手が子どもたちにもたらす「自信」。もしかしたら、非行防止の一助にもなっている。このひと時、まさに、多くの住民が一体となった「小野だけの地域文化」。今後も、続けていきたいと思っています。

【体育大会】

ハイライトは、年齢別「分館対抗リレー」。
各地区で年齢別に選出された選手たちが、地域を背負い、バトンをつなぎ、ゴールを目指します。
大きな声援、拍手。
同じ地域に住む住民が一体になる緊迫した時間。
「びり」になっても、「よく頑張ったねえ」。
この盛り上がり。すごい。

※私が学んだこと

バトンが、年齢別、さらには、隣近所の人をつないでいる。
まさしく、人と人が支えあっている地域づくりだ。
この成果が災害時にも、きっと役立つと願っています。

【文化祭】

生け花、絵画など、個人はもとより、ボランティア団体や、幼稚園、小学生、中学生等、子どもたちの多くの作品等、活動成果発表による会場いっぱいの展示。

大ホールでは　コーラス、民謡、カラオケ。
恥ずかしながら、私もステージで歌っています。
小野名物の「うどん・いなり」は絶対に欠かせません。
味自慢の女性達がつくる、「出汁」大人気。
「少し甘めの味」美味しかった。
「この味を求めて毎年来ています。」この言葉。
陰でお世話をしている女性グループにとっては、「元気」な応援になっています。

※私が学んだこと

文化祭は、参画した住民が主役になれる機会になっている。
小野に住んで良かったと思っていただく良い行事になっている。
今後も、続けていこうと思っています。

【村芝居】

文化祭に関連した行事です。
昭和三十年代までは実施されていた地区もありましたが、今では、小野地区と雄郡地区が実施していると思っています。

役者の芝居の腕前はプロ級、それでも、セリフを忘れ、困っていると、会場内から声援があります。

まさに参加者も演じている「田舎芝居」。おひねりが飛びます。

高齢者も笑顔がいっぱいです。

今では、老若男女の芝居見物で、会場の小野小学校体育館は、超満員です。

※私が学んだこと

とかく孤立しがちな高齢者にとっては、年に一度の「楽しみ」。

世話人の確保等、苦労はありますが、できる限り、続けていこうと思っています。

このほか、毎年テレビ等の取材がある「小野地区女の秋まつり」

「わっしょい。わっしょい」威勢のいい掛け声。

神輿を担ぐ女性が主役の新たな行事が育っています。

彼女たちには、神輿だけでなく、小野地区を背負う人になることを願っています。

これらの事業が、微力ながら、子どもも大人も一人ひとりが故郷を誇りに思い、自らの居場所と夢を持って生きることに役立つことができれば、公民館長としてこの上ない喜びです。

ここまでは、公民館主催事業の一部を報告してまいりましたが、時代の進展・変化とともに、小野地区でも、課題があります。

・子どもたちを支える公民館行事の在り方。

・個人主義から派生する共助機能の低下。

・新旧住民の連帯感を醸成していく行事の見直し。

・災害時に住民を守る公民館の在り方。

・地域での世話人の確保　等々です。

これら課題に向かっては、第四次まつやま教育プラン二十一を指針とし、公民館の世話人と共に、住民の生活に即した学習の機会や行事を企画・実施をしていこうと思っています。

終わりに。本年十月二十二日、二十三日には、第四十二回全国公民館研究集会愛媛大会が松山市で開催されます。

県内外からのお客様を「おもてなし」の心をもって迎え、素晴らしい大会になるよう皆様のご支援・ご協力をお願い申し上げます。

公民館運営審議会委員からの提言

運営審議会委員として思うこと

上島町公民館運営審議会　委員　小澤宏次

「上島町社会教育委員並びに公民館運営審議会委員を委嘱します。」という委嘱状が、平成三十一年四月一日に届きました。仕事内容が良く理解されないままお引き受けしたことを反省しつつ、現在に至っています。今一度、公民館運営審議会委員の仕事内容について調べてみました。

社会教育法五章〈公民館〉第二十条（目的）・・・第二十九条（公民館運営審議会）「公民館に公民館運営審議会をおくことができる。」と明記されています。そして、「公民館運営審議会委員は、館長の諮問に応じ、公民館における各種の事業の企画実施につき調査審議する。」第二十二条（公民館の事業）目的達成のためにおおむね六つの事業が明記されています。

ところで、平成十六年十月一日に町村合併により、弓削町、岩城村、生名村、魚島村の四か町村が一つになり上島町が誕生しました。旧四か町村には公民館があり、それぞれの特色を生かした運営がなされていましたが、合併により活動が徐々に鈍ってきたのが現実ではないかと推測します。一方、伝統文化など引き継がなければならないものは、一部引き継がれてはいますが、課題を洗い出し、今一度運営をはじめいろいろな面について整理し、再考・再構築・吟味するときではないかとも考えます。旧生名村と旧弓削町に橋が架かり、令和三～四年には旧岩城村にも橋が架かり、往来が頻繁になり、より上島町が、一体化されていくことが期待されます。そのような状況の中「社会教育を基盤とした人づくり・つながりづくり・地域づくりの拠点として、公民館が地域の実情に合わせて柔軟に運営され、その活動が一層活性化されるようにしなければならない。」と文部科学省の地域学習推進課も述べています。（平成三十年十二月二十一日　事務連絡より）　全くその通りだと思います。

さて、長年子どもの教育に携わった一人として、子どもと公民館活動について考えてみました。子どもを取り巻く環境は、都市化・過疎化の進行、核家族化・少子化・高齢化、受験戦争の過熱化をはじめ、モノがあふれ、利便性・効率化が重視され、また仮想現実（バーチャルリアリティ）が浸透するなど人とのつながり、地域とのつながり、社会とのつながりが希薄化になりつつあるなど、子どもの「生の生活体験」が不足し、子どもを取り巻く環境が大きく変化しています。そのような状態の中で、学校教育と社会教育が力を合わせて公民館活動を推進し、心豊かでたくましく生きる力を身につけた子どもの育成が大切になってきます。

上島町では、平成三十一年度より本格的に学校運営協議会（コミュニティ・スクール）を立ち上げ、学校・家庭・地域が一体となり、①学校運営・教育活動の質の向上②地域の子どもはみんなで育てる意識の向上③地域を大切に思う心の醸成④地域の活性化（学校を核とした地域づくり）を目指して、無理なくできることから取り組んでいます。特に、子どもたちに①安心感・自己肯定感の高まり②学びや体験活動の充実③地域のよさの実感④社会性の高まりの効果を期待して、推進しています。特に、私が心配することの一つに、多くの子どもが「生産体験」が少なく、「使う体験」「消費体験」が多いことです。例えば、食べ物の大切さを実感したり、生産者への感謝の念を抱くようになるには、「自ら汗して、畑を耕し、種を蒔き、除草し、施肥し、収穫していく」過程をただ聴いて学ぶだけでなく、自ら実践していく体験を積む中で、少しずつ育まれていくものだろうと考えます。

また、平成十七年度より、小学六年生が「かみじま事典」を作成し、ウェブサイトで情報発信し発表しています。総合的な学習の時間に、地域の大人への取材や郷土資料などを使って調査・研究し、「今暮らしている地域の過去や今を知ることから、自分の今や未来を考える」ことにつながります。学校と地域を繋ぐ、学校教育と社会教育を繋ぐコーディネーターの存在が重要であり大切だなと改めて実感しているところです。今後とも、地域の特色を生かし他機関と協調し、人づくり・つながりづくり・地域づくりの拠点として、公民館活動を柔軟に運営しなければならないと考えます。そして学校教育の充実や地域活動の活性化、地域社会の再生に繋がればと願うばかりです。

公民館とわたし

愛南町西海公民館運営審議会　委員　吉田羊子

愛媛県最南端に位置する愛南町は、二〇〇四年に五か町村（内海村・御荘町・城辺町・一本松町・西海町）の合併により誕生しました。私が生まれ育った西海地区（旧西海町）は、現在西海町を愛南町に置き換え、旧の字名を継承し十六の字名で受け継がれています。公民館は、西海公民館（西海町民会館）、西浦公民館、福浦公民館、そして武者泊分館です。西海公民館は愛南町船越（船越湾）に、西浦公民館は愛南町中泊（西浦湾）に、福浦公民館は愛南町福浦（福浦湾）にあり、武者泊分館は福浦湾を越え高茂岬側（外海）に位置しています。学校区は統合が進み、船越小学校と福浦小学校の二校のみとなりました。

ちなみに私は船越に在籍し、高齢者の集うサロンにも関わっています。齢七十歳になります。本当に小さな地区ではありますが、私が小学生時代（昭和三十年代）には一万人近い人口ではなかったかと記憶しています。その頃から公民館の図書室へ通い、ドリトル先生旅行記やグリム童話に夢中になり、メアリーポピンズの空から降りてくるあの傘へ憧れ、ＳＦ小説に胸ふくらませたりしたことが思い出されます。

成人式にはたくさんの若者が希望を胸に公民館から巣立っていきました。冠婚葬祭も挙行され、喜びや悲しみも幾重にも通り過ぎた事でしょう。昭和五十年代には、未だ五千人を超える人口を擁し、公民館や商工会が中心となって開催していた「西海海中公園まつり」のスタッフの一員として働かせてもらったことも良き想い出となっています。

公民館運営審議委員になって四年目を迎えた今、西海地区の人口は三千人を切りました。過疎化の波は止まるところを知りません。加えて私たちの地区の高齢化は、県内でも高い水準にあります。そんな中、公民館を中心に地域を元気にする取り組みが続けられています。その一つが「シーパークふなこし夏祭り」です。西海音頭から始まり、「西海海中公園まつり」のような大規模なお祭りではありませんが、それでもフィナーレは見ごたえのある花火で終わります。毎年新しい企画もあり、今年は風船を使って色々なものを作り出す風船王子のパフォーマンスが子どもたちに大人気でした。また、船越保育園児と船越ふれあいサロンの高齢者で毎年八月に旧暦の七夕に合わせて笹飾りを作り、公民館フロアーに飾ります。今年で三回目の子どもたちとの交流は楽しく、たくさんの元気をもらいながら行動し、人との繋がりの大切さを実感しているところです。これからも夏祭りのイベントとして続けていければと願っています。毎週水曜日には、ライザップの健康体操を公民館三階で実施していると聞きました。健康寿命を維持し元気な高齢者で居られることが他人事でなくなった今、参加を決意しています。今は亡き大先輩の好きだった〝生涯青春〟の言葉が彼女の笑顔と重なって思い出されます。

六月に開催される愛南町トライアスロン大会も今や恒例行事となりました。県内外から多くの選手や応援の方々が来訪される一大イベントとなり、ここでも公民館は活動の中心を担っています。中でも四百名弱の参加選手に手渡すメダルは公民館で作成し、校区の船越小学校の児童や先生の協力のもと、そのメダル一つひとつにメッセージを書いて時間をかけて作られていると聞き驚きました。交通規制を敷き、西海地区で実施される大会は多くの方々の協力と誠意で成り立っています。選手の皆さんは、愛南町民の応援とおもてなしの心に感謝しながら喜んで帰って行かれます。町民の素朴な一生懸命さを肌で感じているのかも知れません。

公民館は、災害避難所としての役割も担っています。小学校もまた、しかりです。今年は、船越小学校児童と地域住民との合同避難訓練や避難所開設と運営について学ぶ機会をいただきました。何が起こってもおかしくない時代、異常気象や地震の際に命を守る行動の大切さも教わりました。地域の団結や絆（地域力）をどう生かすか、子どもたちから教わることもたくさんありました。今回、私が紹介した事例は公民館活動のほんの一部にすぎません。日々地区住民と関わり、要望や意見を聞き、足し算引き算しながら、より良きものを目指す公民館主事の皆さんのご苦労は計り知れないものがあると思います。地域住民に寄り添い、見守りながら長年培ってきたノウハウを生かし、時代と共に進化し、時代に即した運営と活動を維持して行かれんことを願っています。地域の方々が笑顔で集える憩いの場をこれからも提供し続けていっていただければ幸いです。

きてみなはいや おらが公民館

地域と連携のできる公民館活動

四国中央市長津公民館　主事　績木美紀

一　四国中央市と長津公民館の概要

四国中央市は、平成十六年に川之江市、伊予三島市、宇摩郡土居町、宇摩郡新宮村の四市町村の合併で誕生しました。長津地区は津根・野田の二地域から成り立っており、面積約五・九㎢、世帯数千九百十五戸、人口四千三百四十七人の旧伊予三島市に隣接する土居町の東端に位置する兼業農家の多い地域です。地区内にはこども園・小学校・特別養護老人ホームを有しています。また、インターチェンジがあるため、運送業をはじめ、海岸側は加工業、倉庫や企業の進出も多くなってきています。

長津公民館は、昭和二十五年旧村役場に設置され、五十一年に前公民館は建築されましたが、地盤に問題があったため、新築移転をして、平成二十六年の四月に現在の場所に新しく開館しました。昨年度は新館五年目の節目として、様々な行事で盛り上がりました。

二　地域との関り

長津公民館は、市と地域運営委員会が契約を結び、地域の方々で管理運営を行っており、運営委員会は、各団体の代表者で構成されています。活気あふれる明るい地域づくりを目指して、運営委員会を中心に、自治会の協力を得て地域主体で活動を展開しています。

三　地域と連携する活動

①愛護班活動（子どもから大人まで）

愛護班は、地域全体で子どもを見守り育成するために、全戸加入で地域の全ての方が愛護班員です。現在、自治会単位で組織され、班長は自治会長が兼任しています。駅の清掃、危険個所点検、市内一斉清掃、ふるさと夏祭り、敬老会、公民館祭やどんど焼き、スポーツ大会とほとんどの行事を公民館とともに活動して盛り上げています。また、子どもの健

全育成については愛護班を中心に地域を挙げて取り組んでいます。

②ふるさと夏祭り

運営委員会と各種団体が主体となって、企画から会場の片付けまで行っています。以前は、青年団を中心に盆踊り大会として開催していましたので、青年団の解散とともに中止せざるを得なくなりましたが、地域の皆さんの要望とご尽力のおかげで平成十七年に復活してからは、毎年開催しています。園児の可愛い盆踊りの後に地元の赤星音頭を地域の方々も踊ります。各種バザーから祭り最終の花火まで、地域の交流の場として夏のイベントは欠かせなくなっています。

③敬老会

七十五歳以上の高齢者を対象とした事業ですが、運営委員会と愛護班が主体となり、実行委員会を立ち上げて開催をします。当日は市長から表彰される式典が執り行われるだけではなく、小学生の金管バンドや公民館利用グループによる演芸で、地域一丸となって高齢者をお祝いします。

④公民館祭

公民館利用グループ及び団体による活動の発表会及び、生活文化展です。毎年、十一月最後の日曜日に開催しています。利用グループの発表をはじめ、小学生・園児による様々な作品も展示し、発表会にも出演して公民館祭を盛り上げてくれます。昨年度は第四十回の節目と、新館五周年記念で来場者に紅白餅を配ったりと心に残る記念行事となりました。

⑤どんど焼き

小正月を中心に行われる火祭（どんど焼き）で、正月の松飾りやしめ縄などを集めて燃やし、一年の無病息災を願うものです。どんど焼きを伝統行事の継承として取り組んでおり、以前は大人用と子ども用の二つのどんどを制作していましたが、藁の入手が困難となり、現在は一つのどんどを愛護班、長寿会、社会福祉協議会、消防団や様々な団体にご協力いただき、組み上げています。

⑥放課後子ども教室（あんたれすＫＩＤＳ）

子どもたちに様々な体験の場を提供し、地域の方々とのふれあいを通じて、安心して地域で生活できる環境づくりを目標としています。陶芸教室・お菓子作り教室・みかん狩り・生花教室・読み聞かせ教室等取り組んでおり、指導者は地域の皆さんにお願いをして実施しています。

四　おわりに

社会生活が複雑化していく中で、少子高齢化が進み人間関係が希薄化している今、「地域のことは地域で」をモットーに連携を継続していく事で、より一体感が深まってきています。公民館の活動は地域の方々に支えられて成り立っています。今後も地域住民主体の活動の場として、公民館が交流の拠点となるよう活動を展開していきたいと思います。

二名地区夕涼み大会について

久万高原町公民館二名分館　主事　中田孝治

二名地区は、久万高原町の西側に位置し、十一自治会からなる小さな過疎地域です。多くの若者が仕事を求め、都会に転出し、後継者が少なくなっています。

そんな中、久万高原町が林業・農業の後継者育成に力を入れ、地域の活力が復活しつつあります。そんな地域の夏祭りについてご紹介いたします。

夕涼み大会は、昭和五十年から二名小学校のキャンプとして始まった夏祭りです。夏休みに入り、親子でキャンプファイヤーを前に手持ち花火などで楽しみ、子どもたちは学校に宿泊する行事です。地域では、お盆に夏祭りとして盆踊り大会を開催していましたが、地域が学校行事に参加することで、地域一体の夏祭りが始まりました。

地域の消防団の方が、火薬の取り扱い免許を取得し、自分たち（消防団）で花火を打ち上げ、盛大な花火大会の幕開けになりました。その後、二名小学校が閉校になり、事務局も地域に委ねられました。

毎年、地域の部落役員、公民館役員、自治会長が集まり、夕涼み大会運営委員会を立ち上げ、役員を選出し、役割分担を決め、実行委員会を経て、当日に臨みます。現在は、人口も減少し二百五十人ほどの小さな地域での公民館行事として開催し、打ち上げ花火も専門業者にお願いしています。

運営資金については、自治会長を通じて地域全戸の人にお願いをして、寄付による資金を調達しています。また、打ち上げ花火の資金は公民館三役が個別に伺い特別寄付として調達しています。

夕涼み大会の周知については、現在二名地区に住んでいる子どもたちが通っている、父二峰幼稚園・小学校の先生にお願いをして、園児・児童にポスターを制作してもらい、町全体に周知活動をしています。配布については、公民館役員が商店・職場・公共施設などにお願いをして貼らせてもらっています。

毎年、大会の日に梅雨が明けているか、雨模様ではないか、天気予報にくぎ付けです。朝から雨天であれば室内とあきらめもしますが、夕方から雨天になればこれまた大変。全ての器具類、机・いすなどを移動させなければならないからです。数年に一度くらいは雨天もありますが、野外の満天の星空の下でのありがたみがヒシヒシと感じられます。

当日の司会進行は公民館役員が行い、来賓の方々にご来場いただき、いよいよ夕涼み大会がスタートします。来賓ご挨拶の後、地域の子どもたちのかわいい演技を先頭に、先生

大勢のお客さんで賑わう会場の様子

先生たちも歌と踊りで盛り上げてくれます！

たちのカラオケや普段見られない全力投球の踊りなど、盛り上がっていきます。また、地元カラオケクラブのカラオケショーや、役員と地元有志の若者たちの踊りなど、最高の盛り上がりを見せています。

催し物については、運営委員による売店、婦人グループによる売店、中高生による売店など、お客様と接しながら楽しんで活動してくれています。そして、もう一つ忘れてはいけない、地元建設会社の寄付による金魚すくいが用意され、盛大に賑わっています。

ラストを飾るのは、打ち上げ花火です。毎年、七月第三日曜日（連休）開催予定なので、夏場最初の花火として、遠くから大勢の方に足を運んでもらい喜んでいただいています。

金魚すくいはいつも子どもたちでいっぱい

多くのお客様からの感嘆の声を聞くと、やりがいを感じると共に、来年も続けたい、続けなくてはならないと意気込みを噛み締める瞬間です。

最後になりましたが、現実問題として、人口も減り、高齢化が進む中、夕涼み大会の存続が難しくなっています。各戸からの寄付も減り、寄付はしても当日大会には行けないなど、運営にも支障がでています。今後、地域の人材や自然環境を生かした取組みをしなければならなくなってきています。一方で、この大会の為に、ふるさとに帰って、準備・運営・片付けと支えてくれている影の若者たちも多くいることに感謝しなければなりません。

今年で四十三回目を迎え、歴代続けてきた伝統行事を絶やさないためにも地元に生まれ、地元に残ってくれている若者たちを中心に地域を盛り上げ、五十回目（半世紀）を目標に公民館活動全般を全力で維持していきたいと思います。地域が一つになり、一つの事を成し遂げる。熱意ある行動の中で育ってくれた子どもたちは、ふるさとを大切に思い、愛着を醸成し、後継者となってくれることを信じています。

花火は会場のほぼ真上に上がります

愛媛県公友会について

愛媛県公友会（若松進一会長：会員数二十七名）は、県公連、郡市・地区公連の役職員であった方、県教育委員会等で公民館担当者であった方、学識経験者や会の趣旨に賛同する方などが会員となり、本県の社会教育の進展や地域づくりに寄与することを願って、昭和六十二年に発足しました。

公友会では、「あつまる・まなぶ・つなぐ」を基本理念に公民館を愛する方々が「新会員」として集われることを心から願っております。

常に学び、情報交換を図るとともに、県公連・郡市（地区）公連・行政等とも連携・協力しながら、本県の公民館活動の活性化と生涯学習の推進に、引き続き貢献してみませんか。

新規ご加入の問い合わせ・申し込み先

〒七九一―一一三六
松山市上野町甲六五〇
県生涯学習センター
県公民館連合会事務局内
愛媛県公友会事務局
TEL　〇八九―九六三―三五八三
（ファクシミリ　同番号）

つどう まなぶ むすぶ

子どもたちと防災

～つどう（六十人）まなぶ（生き抜く知恵）むすぶ（角野（すみの）の絆・助け合い）～

角野校区連合自治会総務部長
角野公民館運営審議会委員　品川　正

一　お礼（公民館報九月号より）

今年もまた公民館の体験行事であるサバイバルキャンプ（一泊二日）を校区の皆様のご協力を得て実施することができました。厚くお礼を申し上げます。

紙面をお借りし、まず子どもたちに一貫して伝えたいことがあります。それは、自然災害の大型化に伴い災害はいつどこででも起こりうるという危機感と生き抜く知恵と知識を持つことです。更に、迫りくる東南海地震、地球温暖化の進行に伴う経験した事のない未曾有の災害の遭遇にどう対応していけばよいのでしょう。子どもたちには災害に強い人間関係の構築が必要です。

それは友情、助け合いという強い絆です。仲間はずれやいじめをする暇はありません。子どもも大人も仲良くしなければなりません。

子どもは、大人と違って一度や二度の失敗も何度もやり直し、チャレンジできる強さがあるものです。喧嘩しても仲直りできる力を持っているのです。大人はなぜ子どもたちに助け合わなければならないか、自ら努めるとともに子どもたちにもっともっと教えるべきです。

もう一つは生き抜き、生き延びる知恵と知識を身につけることです。防災の知恵も学校や家族で話し合ったり防災キャンプや訓練に何度も参加したり、先輩たちから学ぶことも大切です。防災の知恵・知識は継続とくり返しから多くの収穫があるのです。

私は、子どもの頃は和歌山に住居を構え生活をしていましたが、その頃は台風で床下浸水が毎年のように押し寄せていました。そんな所で先人・先輩から多くの知恵を教わりました。おかげさまで防災の知恵は少しばかり余計に持ち合わせています。

新居浜市は比較的大災害は少ない地区ですが、平成十六年に台風による死者も出しました。また、角野地区の一部には地滑危険地区があります。しかし、子どもたちには殆ど実経験がなく分かりません。是非ともこのキャンプや地区の総合防災訓練（二百人規模）に参加させ（つどい）経験を重ねる（まなぶ）ことが大切です。親や大人が不在の時に災害が発生した場合、子どもは助かりますか？そのためには子どもの防災力（生き抜く力）と近所との強い絆（友情と助け合い）を深めることが最優先です。つどい・まなび・むすぶ事でより一層深化させることではないでしょうか。

結びに一つお願いがあります。自治会離れが進んでいます。未加入の親（大人）にまず

加入して頂き、子どもと共に学び我が角野の防災力と角野の絆の益々の活性化と発展にご一緒しましょう。末永くご理解とご支援を何卒よろしくお願いいたします。

二　子ども（参加者）の感想文

「サバイバルキャンプに参加して」

角野小学校六年　男子

少しの夕立があったけど暑い日が続く二日間のこのキャンプに参加して、避難所での苦労を知ることができました。

畳を浮かせて段ボールをはめ込んだ壁を作ったり、簡易ベッド作り、ドラム缶・簡易プール風呂、理科教室（浮力実験と着衣水練）はしご車などを体験しました。

炊き出しご飯カレーは、世界では毎日普通に食事ができないで、たくさんの子どもが栄養失調や飢死しているニュース（ユニセフ基金）がテレビで流れているのを思い出しました。サバイバルの食事はぜいたくな食事でした。好き嫌いせずおいしく食べる大切さを学びました。

また、初めて会って、泊まった中学生や大人と一緒に生活し、防災の知恵も学び、大変よかったと強く思いました。

三　感想文からの考察・成果

子どもなりに防災意識の深化・高揚が見られました。第一は「食事への世界的な視野に立った防災意識」は圧巻でした。第二は「人間関係の視点」が書かれていたのは大きな成果でした。好評の体験は泊まり、はしご車（写真①）着衣水練（写真②）食事、古代火おこし、の順でした。自治会の立場と役割の重要性を痛感しつつ、来年度も公民館との更なる連携と深化を願い継続実施をと思っています。

写真①「防災訓練はしご車」

写真②「着衣水練」

地域ネットワークのハブ（HUB）

西予市田之筋公民館　田之筋緑の少年団　代表　**中　野　聡**

ハブ（HUB）。今回、寄稿の依頼をいただいてから自分なりに公民館の役割を整理した結果、行き着いた公民館のイメージである。ちなみにウィキペディア的にハブとは次のように定義されている。

①ハブ（機械）－車輪の中心部にあって、リムと車軸とをつなぐスポークが集中する部分・構造。

②ハブ（ネットワーク機器）－イーサネット、USB、IEEE 1394などにおいて、ネットワークの中心に位置する集線装置であり、複数のネットワーク機器を接続する装置。

③ハブ（動物）－南西諸島に広く棲息するクサリヘビ科ハブ属の毒蛇。

③は全くもって的外れではあるが、①②にいたってはイメージにぴったり当てはまる。

脱サラで就農して十三年目。両親の地元とはいえ生まれも育ちも違う自分にとって、地域の方々とつながりを持つきっかけとなったのは小学校のＰＴＡ活動であった。先生いわく、西予市内にある小学校の中でも群を抜いて地域行事が多いらしく、その中でも中心的なポジションにいるのが「緑の少年団」だと思う。

その歴史は三十年以上、地域に飾るプランターの花植えや米づくり体験、キャンプ、山登り、スキューバダイビング、ピザづくり、スキー体験など、自然のふれ合う体験を中心とした課外活動を通して子どもたちの自立を促す役割を担っている。といいながら大人が楽しむこともけっして忘れてはいないが。

この少年団の活動を中心となって支えてくれているのが公民館であり、事務局を担ってくれているのが公民館主事であり、この場を借りて心から感謝の意を表したい。

同じ小学校の保護者とはいえ、年代や職種も異なるので、何かきっかけがなければ会って話すこともなかったのだが、少年団の役員を受けてからこの状況は一変した。年数回実施される役員会や数々のイベントとその慰労会、忘・新年会などの飲み会など、役員同士の濃いコミュニケーションの時間が大幅に増加。正直面倒くさいと思うこともあったが、ここでの人とのつながりが今の自分を支えてくれている。違う考え方同士の人間が集まって、子どもたちに素敵な時間・体験をさせてあげようという共通の目標をもって活動する中で、たくさんの学びや気づきを得ることができた。賛否両論あるかと思うが、ざっくりとまとめると次のような感じになる。末子が卒業する来年度が役員最後の年となるが、仲間とともに楽しい時間を過ごせればと思う。

・手を出しすぎない。
・失敗を許容する。
・一緒に楽しむ。

人生の折り返しをとうに過ぎて思うことは「結局、どんな人とつながるかで人生が決まる」ということにつきる。いま少年団とは別に、田之筋地区地域づくり協議会という組織にも関わっている。ここではさらに世代の違う人たちが集い、地元の「活性化」いわば「生き残り」という共通課題に向かって様々な課題に取り組んでいる。やはりこの活動の中心も公民館であり、地域にある多様なネットワークがつながって、大きなプロジェクトを回している。その中で自分ができること、自分の役割を果たしながら公民館というハブにつながって地域の活性化に貢献したいと思う。

緑の少年団活動「田植え体験」

緑の少年団活動「キャンプ活動」

地域づくり協議会製作「ワラの恐竜広場」

優良グループ紹介

みんなの協力を得てすすめる愛護班活動

南山崎校区愛護班連絡協議会　事務局　鶴岡憲雄

一　校区、愛護班の概要

南山崎校区愛護班連絡協議会は、伊予市中心地から南東部に位置する大平地区で活動しています。

大平地区は、地区の中心にある南山崎小学校の校区と重なる地域コミュニティが色濃く残る地区です。市街地に近い平野部は田畑が広がるなか、小規模な住宅団地が点在しており、山間部には有名な唐川ビワの産地がありミカン等の柑橘栽培も盛んに行われるなど、多様な姿を見せるのどかな地域です。十九の地区が四広報区に分かれて構成されており、人口は千九百四十四人、世帯数は八百十九世帯（令和元年五月一日現在）です。

この地区で活動する南山崎校区愛護班連絡協議会は、会長一名、副会長四名、会計一名、幹事二名、常任理事四名、顧問七名の本部役員に加え、十九の地区から選出された地区役員三十名により構成されており、一戸当たり二百円（令和元年度）の年会費と助成金等を活動資金として、地域の人と子どもたちのつながりを大切にするとともに、地域貢献を目指して日々取り組んでいます。

二　主な取組の紹介

○愛護班サマーキャンプ

南山崎小学校の児童（令和元年度全校生徒九十一名）を対象とした一泊二日のキャンプで、小学校夏休み期間中の恒例行事として周知されている、愛護班活動の主要行事です。

グラウンドや体育館の利用をはじめとする小学校の全面的な協力と、ＯＢ中学生や大学生、地域の方々の協力を得て実施しています。

小学校を通じて参加者の募集を行いますが、例年、全校生徒の八割程の参加があり、児童、中学生・大学生ボランティアを縦割りに班分けをして、大学生をリーダーに学年や世代を超えた交流を図りながら、班員で協力して活動していきます。

活動一日目は、夕食のカレー作りの具材を賭けたレクリエーション・ゲームに始まり、役員と父兄が作ってくれた昼食（焼きそば）を食べ、プール遊びの後、班毎に夕食のカレーライスを作ります。飯ごうでお米を炊き、カレーを作ります。カレーの具材は、牛肉・豚肉・鶏肉・シーフード等で、午前中のレクリエーション・ゲームの順位によって班毎に違います。でき上がった各班自慢のカレーは、市議会議員、広報区長、小学校長等来賓者によるコンテストにかけられ、表彰も行われます。皆で賑やかにカレーライスを食べたら片付けをして、自分たちの寝床となるテントをグラウンド脇に張ったら、日の落ちたグラウンド中央で、大学生リーダー主導によるキャ

ンプファイヤーを行い、就寝となります。

二日目は、早朝のラジオ体操に始まり、テント等の片付け、役員・父兄らが準備してくれた朝食を食べます。その後、最終片付けと清掃等の奉仕活動を行ったら、サマーキャンプは終了となります。

子どもたちの絆が深まるとともに、自立心と責任感を養い、地域の方々との交流によって地元愛を育てることにもつながっている行事の一つであることから、これからも継続的して実施します。

○農業体験イベント（さつまいもの栽培）

近年、土と触れあうことの少なくなってきた子どもたちに、農業の一端を感じてもらいたいという現会長の案により今年度初めて企画した行事です。

愛護班サマーキャンプ

小学校を通じて参加者の募集を行い、父兄等にも一緒に積極的な参加をお願いしています。

行事を始めるにあたり、畑の借用や準備、指導者の依頼など、愛護班役員のネットワークをフル活用し、地域の農家の方々に協力していただきながら実施しました。

一回目は五月下旬に苗を植え、十月中旬の二回目には、芋ほりをしてさつま芋を収穫し、畑で火をおこして焼き芋にして、皆でおいしくいただきました。二回とも泥だらけになってもよい格好での参加をお願いしました。収穫への期待と喜びを感じることができ、親子の笑顔あふれるほっこりとした行事となりました。

この行事では、日程的な問題もあり、子どもたちは苗植えから収穫までの間に二回しか参加できず、農業の楽しい部分のみの体験となってしまいました。畑の準備や草引き等の管理、収穫後の後始末などの「しんどくて面倒で難しい部分」を体験させられなかったことが反省会で挙がっており、行事を企画する段階での熟考が今後の課題です。

農業体験イベント

○子どもを語る座談会

子どもたちの健全な育成を地域ぐるみで支援するための取組として、小中学校ＰＴＡ、地区公民館と共に、「地区住民どなたでも参加してください」と周知して、夏休みに入る前の七月上旬に毎年実施している行事です。

まず、小・中学校の先生から夏休みの生活等について、説明があります。次に講師の講話を聞きます。演題は「プラスの言葉は幸せを呼ぶ（令和元年度）」、「情報モラルについ

子どもを語る座談会

て（平成三十年度）」等、子どもたちの健全育成に関するものをお願いし、提案していただいています。最後に講話の内容等も含めて、十名程度のグループに分かれて「地域・親・子どもが関わりを持って子どもの健全な育成を図るために」というテーマに沿って懇談をして意見の発表を行います。グループ懇談は、皆が畳の上に座って自由に話し合いができるような、文字通りの座談会の雰囲気で行っています。

子どもたちを、皆で、地域で見守っていくためのヒントを得る貴重な時間となっています。

三　今後の活動

近年の少子高齢化等の問題は、当地区においても例外ではなく、子育て世帯数の減少により、役員の確保等、活動に苦慮する点も出てきています。

しかしながら、取組でも紹介したように、南山崎校区愛護班だけで活動するのではなく、関係各所や地域と協力して活動を行っています。地域行事や学校行事には積極的に参加し、地域の人たちと交流することで地域の連帯感の向上を図るように努めています。

これからも、他の関係機関と連携し、地域全体の活動として、「みんなの協力を得てすすめる愛護班活動」を推進していきたいと思います。

北灘よいとこｗａｙ

宇和島市立北灘公民館　主事　**川本千鶴**

宇和島市南部に位置する津島町。その中心街から海岸線を走った先にある北灘地区は人口約一七〇〇人、魚類や真珠養殖の盛んな北灘湾を挟んで西部・東部と南部の二つに分かれています。その北灘地区を一つにまとめるのが「北灘げんき村協議会（通称：よいとこｗａｙ）」のメンバーです。

「北灘地区の住民が自らの地域の将来像を考え、夢をもち心豊かに暮らせる地域を実現する為、各種団体の協力により、ふるさとのよさを再認識し、安心して暮らせる環境づくり、助け合いによる世代間の交流、地域資源のＰＲ、地域の産業振興、地域に伝わる文化伝統芸能の継承に努めるなど、地域づくりの活動を推進し北灘地区の活性化を図ること」を目的とし、やる気とアイデアに溢れた公民館運営審議会・自治会長・地元団体が集まり、ＫＩＴＡＮＡＤＡ　ＯＮＥ（湾）を合い言葉に発足して七年目を迎えました。

「０と１だけの割り切ったデジタル思考ではなく、0.3も0.7もあるゆるいアナログの世界を目指す」というコンセプトを基に北灘のげんきな仲間たちが、新しいことへのチャレンジや衰退しつつある地域活動の復活に奔走し、北灘地区の「困った」を解消しよう、北灘地区を元気にしよう、北灘地区の人を育てよう、

協議会のシンボルマークが地域で流行

北灘地区の産業を応援しよう、その他、北灘地区住民に喜ばれる事業をしようと、常日頃から広くアンテナを張り巡らせています。

適材適所で各部会を担当する役員は、会合や研修を通してスキルを高め、ＳＮＳ等で情報を共有し、地域行事や小学校・公民館行事でその成果が発揮されます。

毎年三月に行われる「北灘げんき村まつり」は、地区住民の交流の場として、地元関係団体と連携しながら地域産品等の販売、身近なテーマの展示等を行うことで、地域の魅力と課題を再確認してもらおうと始まりました。市内外から集まるたくさんのイベント参加者への温かいおもてなしや気遣いも秀逸で、会場で販売されるオリジナルグルメやグッズの開発にも余念がありません。

北灘げんき村まつりの様子

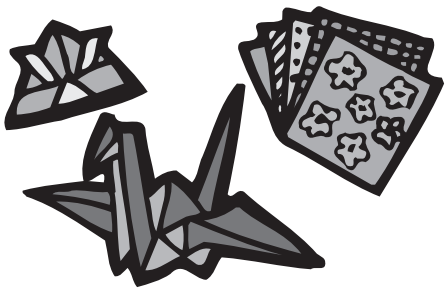
第七回となる今年度は、令和二年三月十五日にｋｉｔａｎａｄａ ｆｅｓ 二〇二〇と題して、音楽を中心とした楽しいイベントを企画中です。盛りだくさんの内容で、たくさんの方のご来場をお待ちしております。

また、地域課題の解決にも熱心で、南海トラフ地震が不安視される昨今、海山に囲まれた北灘地区での防災問題に取り組んでいます。自主防災組織の立ち上げ、定期的な防災訓練や防災士資格取得の推進を始め、今年九月末には北灘小児童を対象とした「こども防災キャンプ」を行いました。

小学生二十一名と教員、げんき村役員が「できるだけ被災時と同じ状況を体験しよう」と、電気も点けない小学校体育館で宿泊体験をし、懐中電灯と非常食で不便な一晩を過ごしました。翌日には地域全体での避難訓練を実施して、消防署や自治会とも連携し、防災講座や応急手当講座を通して地区住民の防災意識の啓発に努めました。

「部落単位では維持できない機能を北灘全体で補完し、北灘地区全体に少しでも元気をもたらすことができるよう新たなネットワークの構築と結束の強化を推進していきたい」と熱く語る役員ですが、「メンバーのほとんどが仕事との掛け持ちのため組織が夜行性となり、平日の昼間の活動ができない。宇和島市地域づくり交付金ありきの協議会なので、自主財源による活動資金を持てていないところが弱い部分。究極的には、協議会が経済的に自立できるようなコミュニティビジネスを立ち上げて、公民館や地域団体と協働で事業を実施できるようになりたい。」と、小さな悩みは情熱でカバーし、大きな目標に向かって前進中です。

これからも北灘の、北灘による、北灘のための新たなチャレンジを続ける、今、宇和島でまぁまぁ熱い団体です。



館長さんこんにちは

今治市中央公民館 本宮 圭治館長さんにご質問

今治市中央公民館
館長補佐 近藤 俊夫

質問一　はじめに自己紹介をお願いします。

平成三十一年四月、館長に就任しました。教育委員会に六年間在籍し、総務関係や青少年健全育成、生涯学習推進に関わりましたが、公民館業務は初めてです。中央公民館では、事業係、管理係をあわせて職員十名が勤務し、市民に役立つ公民館として、公民館活動が円滑に行われるよう心がけています。

質問二　中央公民館の概要（特徴）について教えてください。

今治市の公民館活動の中核施設です。利用者は増加傾向で、昨年度は年間約十七万人に利用され、社会教育関係団体や公民館登録団体などの各種行事、発表会等が絶え間なく行われています。毎年アンケートを実施していますが、六十歳以上の利用者が七割以上で、利用目的も講座やサークル活動が大半です。生涯学習活動を通じた交流の場として、当館の果たす役割は増々大きくなると考えています。

質問三　中央公民館の活動内容（主催事業）について教えてください。

市民が手軽に生涯学習活動に参加できる主催講座を企画していますが、当館で活動されているグループの皆さんの協力なくしては実施できない事業ばかりです。趣味教養講座三十一講座のほか、朗読コンサート、プロムナードコンサート、親子ふれあい体験教室、親子人形劇のつどい、俳句・短歌大会、文化祭など、いずれも恒例のイベントとして市民に長年親しまれています。

たとえば、「親子人形劇のつどい」は、昭和五十九年から毎年十二月に子どもたちへのクリスマスプレゼントとして開催しています。主催講座である人形劇教室の皆さんが、四月頃から今治産タオルを使った人形作りから準備を始め、二か月前から週一回、厳しい練習と反省を繰り返します。そして、市内の公民館、児童館、保育所、幼稚園、小学校にチラシ、ポスターを配布し、できるだけ多くの人に参加してもらえるよう周知します。本番では、楽器を叩いたり吹いたり面白い効果音で盛り上げ、劇の合間も一緒に歌ったり手遊びしたり、かわいい人形たちが客席を回って子どもたちにタッチしたり、とにかく飽きさせません。いろいろなギャグやその年にあった時事ネタまで披露して大人も楽しめます。最後は人形が揃って出口で見送り、一緒に写真も撮ってくれます。終了後のアンケートでは、子どもは「来年も絶対来たい」、「うさぎさんにタッチできてうれしかった」、大人も「手作りの人形でとても心が温かくなった」、「皆さんの子どもを想う優しい気持ちがたくさん伝わってきた」と大好評でした。このように、熱意をもって支援していただく皆さんのおかげで、充実した主催事業が継続して実施できています。

質問四　市内の地区公民館活動についてどのように感じていますか。

運動会、夏祭り、文化祭など各地区の行事へ出席させていただくことがよくあります。こうした行事は、公民館を拠点に地域の皆さんが中心となって行われており、地域の方々に日々支えられていることを実感します。そして、子どもたちやＰＴＡなど若い世代が参加すると行事に活気が出ますし、高校生のテント設営やバザー手伝い、小中学生の太鼓や獅子舞の演舞などは地域の方にとても喜ばれています。いろいろな形で、地域の世代交流が進めば、地域に活気が出て地域のつながりもさらに強化されていくと思います。

質問五　課題と今後の抱負についてお願いします。

利用の少ない若い世代へのアピールや、年々老朽化が進む施設や設備など課題はありますが、運営審議会や利用者の皆さんのご意見・アンケートも踏まえながら、事業や施設管理を丁寧に行っていきたいと考えています。私自身、主催行事のほかコンサートや利用団体の発表会などに参加しています。高齢者の方も多いのですが、昭和の歌謡曲や馴染みの流行歌の演奏や歌では、会場の皆さんが一緒になって歌い、手拍子をして、とてもいきいきされています。公民館活動が市民の生きがい、生きる喜びにつながっています。今後も、市民の誰もが気軽に利用できる「いこいの場」となるよう精一杯努力していきたいと思っています。

八幡浜市白浜地区公民館
中島　和久館長さんにご質問

今治市中央公民館
主事　菅　義　則

質問一　白浜地区の概要を教えてください。

八幡浜市の西部に位置し、人口四千百人の地域で、市の公民館としては人口の比較的多いところです。日の丸みかんで有名な向灘地区、市役所を含む町中地区、その周辺の商業地域・住宅地域、私の住む津羽井地区の山間部とバラエティ豊かな地域です。地区内十一地区に分館があり、我々の活動が全域に発信できる強みがあります。

質問二　地区公民館での問題点と活動内容を教えてください。

少子高齢化が著しく地域を担う若者がいない中で、どう地域を造っていくかが大きな課題です。私の地域も同じように後継者がいないので基幹産業である柑橘も斜陽化しています。あと何年かすると、みかん山のきれいな姿も荒廃して、道の駅みなっとから見るオレンジ色の素晴らしい景色もみられなくなるんじゃないかと。その中で、高齢者の生きがいとそれを支える若い世代とのコミュニケーション、数少ない小中学生との交流で元気を取り戻すことを考えてみたいです。

質問三　具体的な活動を教えてください。

三世代交流スポーツ大会、高齢者訪問、公民館を利用した年寄と若者との趣味の教室、料理教室を組み合わせた交流会等楽しく行っています。

質問四　最近は防災対策にも力を入れているようですが教えてください。

私が防災士になったのが四年前です。公民館による防災訓練に永年参加していた訳ですが、白浜地区には八幡浜湾の南向きに向灘地区があり、背後に急傾斜のみかん山が控えている割に防災意識が低い住民は、行政に頼りきっている感が強いです。また、昔から地形的に大災害に遭っていないことから「うちに限って大きな災害は来ない」という考えが根強い地域です。そこで、三年前に公民館にいる二十人の防災士で白浜地区防災士会を立ち上げ、館長理解の下、地区の防災訓練を防災士会で企画・立案・運営させていただくことになりました。これまで四回行いましたが、一回目は、熊本地震救護を体験した市職員の講話と消火・防災クイズ、二回目は、ＨＵＧ訓練、三回目は、災害対策本部設置後の避難所を時系列で実施訓練、四回目の今年度は、

白浜地区防災フェスタの様子（開講式）

白浜地区防災フェスタの様子（ホイッスル作成）

白浜地区防災フェスタを開催しました。避難所で必要であろう傷病者手当て・運搬体験・簡易トイレ・非常食作り・外部からのＤＭＡＴ・救護ベット・ＮＴＴの非常電話等十三のブースで体験できるイベントを行い、約三百人の参加を得て高い評価をいただきました。

質問五　新しい挑戦にも意欲的ですが、県内に誇れる伝統的な行事についても教えてください。

四十三年の伝統がある白浜地区公民館主催の少年の主張があります。地元中学校と相談しながら、地区内十一地区ある中からそれぞれ一名を選抜し、少年の日の思いを発表していただいています。また、地区の中で一箇所のみこの行事を伝承している所があり、先輩が築いてきた伝統を守る必要も感じています。

質問六　若い人たちとの交流も考えているか教えてください。

他の地区でも新しいことに取り組んでおられますが、若い人たちにも公民館を気楽に利用していただきたいと考えています。親子での郷土料理づくり、夏休みを利用した宿題の共同利用の場、地元の方の一芸を活用した教室等、夢はいっぱいあります。

元気な主事さん

地域のぬくもりに支えられて

西条市大保木公民館
主事　岩間好美

西条市大保木地区は、霊峰石鎚の山懐に抱かれた加茂川上流の小さな集落で、四季折々、一年中、美しい自然や景色がみられます。

人口は一九五六年三千五百七十三人をピークに現在は百七十人まで減少した過疎・高齢化が著しい限界集落です。しかし地域内では、元気で明るい方が多く生活されており、何より自分たちの住む地域や人を大切にされています。

私がこの山の小さな公民館の主事になったのは、忘れもしない十五年前の平成十六年四月です。まだ仕事も十分わからないその年の九月に台風二十一号が襲来し、山は土砂崩れや土石流が相次ぎ市街に通じる唯一の県道が寸断され、一帯は甚大な被害を受け集落は三週間孤立しました。公民館も半壊し、何をどうしていいかわからない中、とにかく一部屋だけでも使えるようにと流れ込んだ土砂を地域の皆さんとかき出し、必死で片付け、二か月ぶりに、サークル活動が再開しました。皆が顔を合わせ、喜び合った時のことは今でも鮮明に覚えています。あれから十五年、今や面影を残さないほど災害の傷跡は修復されました。被災をきっかけに、地域の人と共に汗をかく中、絆が深まり、住民間の連携や情報収集が密になりました。

災害直後、被害状況の把握や高齢世帯の安否確認に手間取り、住民の連携、結束を高めることが必要と感じました。その教訓を生かし、日頃から、公民館に気軽に来館してもらい、住民とのつながりを大切にするようにしています。今では早めの避難を心がけてくれ、避難先を公民館に連絡してくれるようになりました。

公民館活動も活発になってきた頃、お節句会の出し物で、寸劇をやってみようと話が盛り上がり、住民や出身者で素人劇を演じることにしました。この地域の歴史を水戸黄門風にアレンジした脚本で、衣装はすべて手作り、毎日公民館に集まり、知恵を出し合い、米袋で衣装を作ったり、毛糸でかつらを作ったり

と公民館は活気づきました。座員は当初の十二人から二十五人に増え、公民館で台詞や立ち回りの練習を重ねるうちに、みんなが打ち解け、笑いが絶えない劇団になりました。最初は公民館行事で披露していた活動が様々な方面に波及効果をもたらし、他の公民館や施設から公演の依頼が来るほどになり、交流に広がりがでてきました。

私自身も地域にどっぷりつかっていた十二年目に異動があり、他の公民館で勤務した後に、再び山に帰ってくることができ、三年目になります。外に出て、改めてこの地域の良さを思い知らされ、今の自分があるのは、この大保木の自然と心豊かな人のぬくもりなのだと思いました。再びここで仕事ができることに感謝し、地域の役に立ちたいと思うようになりました。

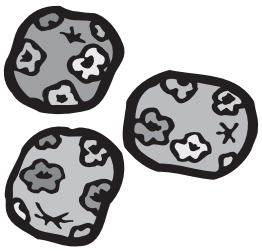
何か新しいことをしようと「かかしサークル」を立ち上げ、村の人口は減ってきているけれど、かかし人口を増やして山を元気にしようと呼びかけ、月一回のかかし作りが始まりました。今では、村のあちこちでかかしたちが笑顔でお出迎えしてくれています。

又、「山に子どもの声を」との地域の思いで、平成二十九年度から里山の暮らしを知って、楽しんでもらおうと「土曜教育」事業を始めました。住民が講師となり、市内の高校生を対象に、地域の特性を生かした「お茶摘み体験」「薪割り体験」「かずら細工教室」「薪でご飯を炊いてみよう」等、年十回のプログラムを展開しています。住民は山仕事や料理、手芸等それぞれが得意分野でリーダーシップを発揮して、高校生が来るのを楽しみにしています。教室が終わると、山で採れた野菜で一緒に食事をしたり、手作りのお菓子をおみやげにもたせてくれたりと、人々の思いやり、優しさを実感する時でもあります。ここ大保木には、町では味わえない、ゆったりした〝山時間〟があるように思います。子ども達も土曜教育で地域の人々に触れ、山の生活に触れることで山に親しみを感じるようになってきています。

今後も地域一丸となり、〝ワンチーム大保木〟で山の魅力を発信していきたいと思います。

私は、この山の自然に癒され、地域の方のぬくもりや優しさに勇気づけられ元気をいっぱいもらっています。

これからも地域の活性化、出会い、ふれあいを大切にして誰もが気軽に立ち寄れる公民館を目指して精一杯努力し、地域の皆さんと共に元気な山の公民館、元気な主事でありたいと願っています。



内子自治センター開館十五周年を迎えて

内子町立内子自治センター
主事補　池田　あかり

私はこの四月に内子町職員として採用され、内子自治センターに配属になりました。内子町は住民による自治活動を推進している地域であり、自治会活動が盛んです。町外出身のため最初は戸惑いましたが、住民の皆さんや自治会活動に苦心される会長さんや事務局長さんたちと接するうちに、徐々に自治会活動というものが分かるようになってきました。

「自治センター」は旧内子町で自治会制度がスタートした平成十四（二〇〇二）年四月から運用され、地域の公民館としての役割とともに、自治会の活動を支援する役割を担っています。その中で内子自治センターは、内子駅や伝統的建造物群保存地区、商店街、保育園や幼稚園、児童館、小中高等学校等を含む六自治会、人口四，二五一人（令和元年十二月一日現在）の地域を管轄しています。平成十五（二〇〇三）年三月に現在の建物が完成し、旧内子公民館の建物から自治センターの機能が移動しました。

今年度は、十五周年という節目の年を迎えました。そこで十一月一日（金）から十二月八日（日）までの間、「髙畑誠一の軌跡を辿る～カイザー（皇帝）と呼ばれた男～」と題し、「令和元年度内子自治センター開館十五周年記念特別企画展」を行いました。期間中は町内の他の文化施設と連携してテーマごとに三つの施設でパネルや史料などを展示しており、内子自治センターでは「髙畑誠一が内子に遺したもの」というテーマのパネル展を行いました。十一月十七日（日）には学芸員さんによるガイドツアーを実施。最終日の十二月八日（日）には管内の伝統文化施設である内子座で記念シンポジウムを開催し、多くの方にご来場いただきました。

内子町は古くから交通の要衝として栄え、明治期には製蠟業の成功も相まって「車馬の往来織るがごとし」と言われるほどの賑わいを見せていました。

その経済的な豊かさは、人々に「内子座」を始めとする娯楽文化や子どもたちの教育に目を向ける余裕を生みました。また内子の木蠟は品質が良く、海外にも輸出されていた事からか、国際的視野を持った人材が多く育っています。ビールの国産化に成功して「ビール王」と呼ばれた高橋龍太郎氏（一八七五―一九六七）はもちろん、内子の子どもたちの自主研修組織であった内子尚武会の初代会長

である重岡信治郎氏（一八七九―一九七九）によれば、彼自身のフランス出張中に内子尚武会の仲間二人とパリで会っていたということで、多くの内子町出身者が海外に進出していました。

今回の企画展で取り上げた髙畑氏も内子尋常小学校時代に同会に学んだ一人であり、小学校の先生に熱心に英語を学び、優れた語学力と才知で鈴木商店という新興商社を名だたる大商社に匹敵するまでに押し上げた立役者です。

その生家跡は管内にあり、今も碑が残っています。またセンターにほど近い内子小学校の正門前には、彼の胸像があります。

昭和四十八（一九七三）年に内子小学校が開校百周年を迎えた際、髙畑氏が奨学資金を寄附するなど、彼の教育支援に謝意を表して建立されたものです。この資金は「髙畑奨学金」として現在も運用されています。また内子自治センターの前身である内子中央公民館の新設の費用として多額の寄附をされました。その寄附金は講堂建設に用いられ、「髙畑会館」と呼ばれた講堂は老朽化によって取り壊されるまで住民たちに親しまれていました。

そんな髙畑氏ですが、町内の知名度はあまり高くなかったそうです。そこで開館十五周年を機に顕彰をしようとの館長の発案で前年度から準備が進められていました。

そんな中、私も今年度から急に参加させていただき、パネル掲示の手伝いやシンポジウムの司会などを担いました。シンポジウムには町内はもちろん、町外・県外からも多くの方々にお越しいただきました。展示を見た方の中には、「すごくよかった。ぜひシンポジウムにも出席したい」と言って周りの人に展示を勧めてくださる方もいらっしゃいました。企画展を終えてみて、気が付くとたくさんの方々が髙畑誠一氏の功績について身近に知ってくれるようになったと感じています。

自治センターという存在が住民の方々にとって身近なものであり、大きな発信力を持っていることに改めて気づかされ身の引きしまる思いです。

郡市公連だより

若者世代の公民館への参画

松山市公民館連絡協議会
事務局　毛利　雄一朗

一　はじめに

松山市では、旧小学校区単位で四十一の公民館本館を設置しています。公民館区内の人口が約三百人のところから約五万八千人のところまで、様々な規模の公民館があり、それぞれ地域の特色を活かしながら、生涯学習講座のほか、地域住民の絆づくりにつながる取り組みを行っています。

松山市公民館連絡協議会は、公民館相互の連携・提携を図るため、毎年開催している松山市公民館研究大会をはじめ、公民館長や職員を対象とした研修会や、ブロック会などの各種事業を行い、研鑽と交流の輪を広げています。

また、公民館主事で構成する主事部会を設置し、公民館事業について調査・研究し、諸課題の解決策についての提案等を行っています。

二　若者世代へのアンケート調査

松山市公民館連絡協議会主事部会は、若者世代の公民館への参加・参画を推進するための調査研究に取り組みました。

まず、現状の若者の意識を把握するため、愛媛大学の協力を得て、大学生を対象にアンケート調査を実施し、約二百件の回答を得ました。その調査結果によると、約半分の学生は自分の住んでいる地区の公民館の存在を知っているが、具体的な活動内容を知っていると答えた人は十六パーセントしかいませんでした。一方で「地域と関わりたい」「イベントや行事があれば参加したい」が、「どんなことをしているかわからない」ために、利用をためらっている可能性があることがわかりました。

三　ハロウィンイベントを公民館で

そこで、これらのアンケート結果の意見を受けて、若者が公民館につながることを目的とするため、以下の要件を盛り込んだ企画を考えました。①事業の企画段階から若者が参画できる。②子どもや若者が興味を持つ内容である。③公民館を利用しやすい空間づくり

を行う。④パブリシティの活用による積極的な情報発信ができる。の、四つです。

主事部会内で協議・検討した結果、近年認知度が高まり、②の「子どもや若者が興味を持つ内容」のものとして、ハロウィンのイベントを公民館で開催することを、研究の検証事業として、松山市の中心部に位置する人口約三千三百人の番町公民館で実施することとしました。

実施にあたって、①の「事業に若者が参画」については、企画段階から大学生に参画してもらい、若者のアイデアをたくさん出してもらったほか、顔にハロウィンのメイクを行う「フェイスペイント体験」のワークショップでは、専門学校の学生と講師に企画運営してもらうなど、これまでになく若者が参画する事業となりました。③の「公民館を利用しやすい空間づくり」は、築五十年の古い建物であることを逆に利用し、約二週間かけて真っ黒なマルチシートで館内を覆って、手作りのおばけやコウモリをディスプレイするなどして、公民館全体を巨大な「お化け屋敷」に見立て、ハロウィンらしさを演出しました。④の積極的な情報発信については、主事部会員と番町公民館事業推進部員が小学校の朝会でPRを行い、公民館の壁面には全長八mの懸垂幕を設置しました。また、チラシやポスターを地区内だけでなく、大学や専門学校・幼稚園などに掲示してもらいました。加えて、これまでにない啓発活動として、新聞や生活情報誌に情報を掲載、インターネット上のイベント情報欄での告知掲載、商店街の大型スクリーンでのCM放映、大学生がラジオに出演してPRも行いました。

結果、約八百人が公民館を訪れ、参加する結果となり、盛況のうちにイベントを終了することができました。

四　若者の参画の推進のために

今回のイベント「番町公民館@おばけの館」は、引き続き番町公民館によって若い世代に喜んでもらえる事業として、パワーアップして継続開催しています。また、松山市公民館研究大会で事例発表して他の公民館にも内容を共有したところ、早速「自分の公民館でも開催したい」という声が上がっています。今後も、公民館の活性化のためには若者世代の公民館への参加・参画が重要な課題と捉え、様々な手法や取組みを考えていきたいと思います。

公民館がお化け屋敷に

運営に参画した大学生

準備の様子

フェイスペイント体験

町を越えての交流事業

松野町吉野生地区公民館
主事　猿屋洋一

一　はじめに

北宇和郡公連は、旧広見町、旧日吉村が合併して新町となった鬼北町、松野町の二町で構成されております。地区公民館は鬼北町六館、松野町に三館の合計九館で構成されております。少子高齢化が進むなか、世代交流など、それぞれが特色を活かした事業を進めております。その中で今回は、二十七年度から行っている町を越えた交流事業をご紹介したいと思います。

二　事業内容

㈠　ドミノ倒しに挑戦

きっかけは、毎年マンネリ化する事業が増え、新しいアイデアを模索していたところ、郡公連の会合での何気ない会話の中で、もともと日吉地区公民館が行っていた「ドミノ倒し」を郡公連の交流事業として行おうということになりました。

会場は松野町の「吉野生交流促進センター」で行いました。ドミノは市販のものではなく、ドミノの形に木材を加工したものを二万個用意しました。当日は保護者・スタッフ含め約百名がドミノに挑戦しました。低学年は直線を基本に、高学年はゆるキャラや図形に挑戦し、ドミノを並べていきました。何度も失敗を繰り返しながら、最後は大人の方が夢中になってなんとか二万個のドミノを並べることが出来ました。

記録は残念な結果となりましたが、並べることの達成感と、他の小学校との交流を深めるよい機会に成ったのではないでしょうか。

㈡　巨大迷路とピザ作り体験

二年目は会場を鬼北町に移し、「成川渓谷」で巨大迷路とピザ作りに挑戦しました。二年目も参加者は保護者・スタッフ含め約百名の参加でした。迷路は前日にスタッフ約二十名が一日がかりで作成しました。迷路の真ん中には櫓を建て、仕切りはコンパネで作成し、本格的な巨大迷路になりました。

当日は各公民館混成のチームをつくり、迷路、ピザ作りを体験しました。迷路では各チェックポイントを設置し、ポイントとゴールまでの時間をチーム対抗戦で競い合いました。

他校の児童と交流が出来、「友だちたくさんできた」とうれしい声も聞くことが出来ました。

三　おわりに

全校生徒三十人前後の小学校が多い地域で、それぞれの児童が交流し、遊びを通して友達作りが出来たのではないかと思います。

このような地域を越えた交流事業をするには、各地域の人たちの協力や保護者・子どもの声を事業に反映していくことだと考えます。これからも少子高齢化が進む中、各公民館が協力して事業を進めていけるよう努力したいと思います。

巨大迷路

ドミノ倒し

令和元年度　愛媛県公民館研究大会
「これからの公民館の役割と課題とは」

会場　西条市中央公民館　ほか

令和元年度　愛媛県公民館研究大会（主催　愛媛県公民館連合会・愛媛県教育委員会）が、「これからの公民館の役割と課題とは」を大会主題として、十月二十四日（木）に西条市中央公民館ほかを会場に開催しました。

開会式には、中村時広知事（代理：三好伊佐夫愛媛県教育委員会教育長）、西田洋一愛媛県議会議長（代理：西原司スポーツ文教警察委員会副委員長）、玉井敏久西条市長、土居英雄愛媛新聞代表取締役社長（代理：柳田幸男専務取締役）ほか、多数のご来賓の方々のご臨席を賜りました。

大会の開会行事では、重信昭雄愛媛県公民館連合会会長のあいさつ、来賓祝辞に続いて、各部門の表彰及び感謝状の贈呈を行いました。

愛媛県教育委員会教育長・愛媛県公民館連合会会長連名表彰では、優良公民館七館、優良公民館職員十九名、愛媛県公民館連合会会長表彰及び会長感謝状贈呈では、優良公民館十三館、優良公民館職員五十一名、優良自治公民館八館、優良団体・グループ三団体、優良グループリーダー三名、優良協力者三名、永年勤続公民館運営審議会委員二十九名、更に愛媛新聞社社長・愛媛県公民館連合会会長連名表彰では、館報コンクール入選十四館にそれぞれ表彰状・感謝状が授与・贈呈されました。

開会行事に続き、全体会では、「未来志向の地域づくりと公民館の役割」をテーマにインタビュー・ダイアローグを行いました。愛媛県公民館連合会専門委員会の若松進一委員長がインタビュアーを務め、登壇者には、小松地域未来塾地域コーディネーター處淳子氏、松山市堀江公民館館長補佐長尾真二氏、ＮＰＯ法人八幡浜元気プロジェクト代表理事濵田規史氏のお三方に、また、西原琢人氏（愛媛大学四年）・山崎芹奈氏（松山東雲女子大学三年）にも、サブ・インタビュアーとして協力いただきました。若松氏の進行のもと、登壇者から、各々の活動事例の提示や参加者への提言がなされ、有意義な意見交換が行われました。

午後からは、分科会を、分科会Ａ「高齢者が活躍する地域づくり」分科会Ｂ「安全安心な地域づくり」分科会Ｃ「地域の特色を活かしたプログラム開発と評価のあり方」分科会Ｄ「学校との連携・協働」分科会Ｅ「人権意識を育てる公民館活動」の五つをテーマとして各会場で開催し、各分科会とも熱心に研究協議（グループ協議）が行われました。

以下、全体会及び分科会について、当日の記録に基づき、その要旨を掲載します。

重信会長あいさつ

会場の様子（西条市中央公民館「多目的ホール」）

【全体会（インタビュー・ダイアローグ）】

令和元年度愛媛県公民館研究大会では、昨年に引き続き、インタビュー・ダイアローグを実施しました。県内から未来の地域に対し、課題意識を明確にした実践を行っている三名の方々に登壇していただき、インタビュアーの軽妙な進行のもと、活動の実績から、公民館の役割や課題について議論しました。また、今年度は、二名の大学生にサブ・インタビュアーを務めてもらい、若者の視点を織り交ぜた話し合いがなされるなど、多くの気づきや学びのある全体会になりました。

テーマ「未来志向の地域づくりと公民館の役割」

インタビュアー

若松　進一 氏（愛媛県公民館連合会専門委員会委員長）

サブ・インタビュアー

西原　琢人さん（愛媛大学法文学部人文社会学科）

山崎　芹奈さん（松山東雲女子大学人文科学部心理子ども学科）

登壇者

處　淳子 氏（小松地域未来塾地域コーディネーター）

長尾　真二 氏（堀江公民館館長補佐）

濵田　規史 氏（ＮＰＯ法人八幡浜元気プロジェクト代表理事）

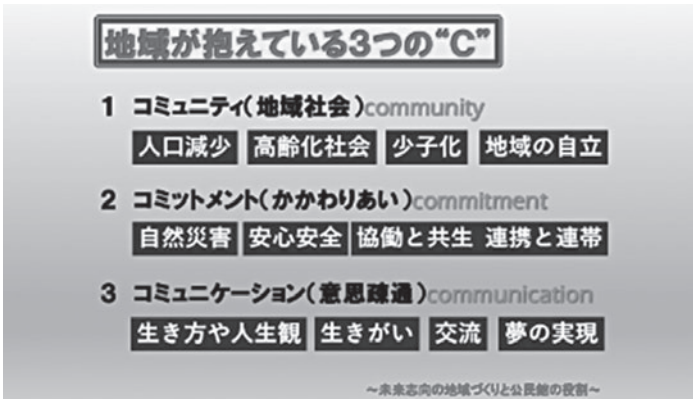
【インタビュー・ダイアローグの記録】

若松　昨年度、初めて県公民館研究大会にインタビュー・ダイアローグという手法を取り入れたが、参加者から「分かりやすかった」と好評であった。全体会でインタビュー・ダイアローグを行うのは、来年度の第四十二回全国公民館研究集会愛媛県大会に向けて三年計画で進めているところであり、複数年の積み重ねによる実践で成果を出したい。

昨年度の大会では、地域が抱える三つのCとして、コミュニティ（地域社会）が抱える課題、コミットメント（かかわりあい）とコミュニケーション（意思疎通）の必要性について皆さんと一緒に考えた。地域が抱える課題は、公民館が直面している課題であり、公民館に必要なことが、地域にとっても重要であるとまとめた。これらを踏まえて、今日のインタビュー・ダイアローグでの討論を進めていきたい。

今回は、大学生二名にサブ・インタビュアーを務めてもらい、若い人の感覚を取り入れることにした。若者の視点も加えて、登壇者の魅力や実践のすばらしさに迫っていきたい。

濵田　八幡浜市から来た。会社員時代を経て、現在は、個人事業主として活動している。かつて、「八幡浜を元気にしたい」という若者が三人集まり、活動をはじめようとしたとき、公民館が最初の活動の拠点になり、地域とのつながりをつくってくれた。あれから十二～十三年経ち、ＮＰＯ団体は、今、地域の人たちに広く認識してもらえる団体になってきた。活動を通じて、より八幡浜が好きになったが、一方で、地域の人たちの意識を変えること、動かすことの難しさも痛感した。



長尾　處

かつて、金融機関で創業支援・融資に携わっていたこともあり、地域をよくする、元気にするアイデアは沢山あるが、形にすることの難しさ＝壁にぶつかった。それをどうにかしたいという思いで、「コダテル」という地域のコミュニティ拠点をつくろうと思い立った。そして今は、様々な事業や組織に関わりながら仕事をしている。

新居浜市で生まれ育ち、西条市で子育てをしながら、現在は、地域の子どもたちに関わる様々な事業に携わっている。自営業（内装業）と子育てに奮闘していた八年前に、「民家の甲子園」というふるさとの魅力を発信する高校生の大会に関わり、高校生が持つ力のすばらしさに感動したことがきっかけで、地域での活動に積極的に関わるようになった。根底には、「子どもたちの未来に役立つ大人でありたい。」「子どもたちとの活動は、地域の未来への投資」という思いを持って活動に取り組んでおり、具体的には、東予高等学校のインターンシップを受け入れたり、小松地域未来塾のコーディネーターを務めたりしている。小松地域未来塾では、西条市教育委員会や小松公民館、小松おやじ部の全面的な支援のもとで事業が実施できており、その取組を中心に話したい。

堀江公民館館長補佐を十一年務めている。堀江地区は、松山市北西部にあり、世帯数が約四千五百、人口が約一万二千人の地域。

平成十四年に堀江地区で学社融合事業に取り組んだ際にＰＴＡ会長を務めていたこともあり、以後、地域ぐるみでの子どもの育成に携わってきた。おやじの会やマラソンの会を立ち上げたり、青少年がまちづくりに取り組むＮＰＯ団体を設立したりすることで、地域に埋もれている人材を発掘してきた。その後、平成十八年に堀江地区まちづくりコミュニティ会議ができ、十四の部会の中の学校支援や放課後子ども教室の部会に、十七年間に渡って関わっている。

地域と学校の良好な関係性を構築することは、子どもの健全な育成はもちろん、高齢者の生きがいづくりや地域の活性化につながると実感してきたこともあり、事例を交えながら、話したい。

若松　處

三人の実践は、地域での新しい取組も含まれており、興味深い話が聞けそうだ。次に、各々の日常活動と公民館がどのように関わっているかについて話を聞かせてもらいたい。

現在、小松地域未来塾のコーディネーターを務めているが、未来塾を始めたのは、娘の中一ギャップで悩んだのがきっかけだった。同じように悩む子どもや保護者を少しでも減らしたいと思い、三年前に、西条市教育委員会や公民館の力添えで、文部科学省の補助事業を活用した未来塾に取り組み始めた。

未来塾とは、中学生の学習習慣づくりや学力向上を目指した事業であり、夏休み期間に、子どもたちの学習のつまずきに対し、大学生や教員ＯＢの支援によって学力を向上させるよう取り組んできた。その際、中学生に未来へのビジョンをもってほしい、学習へのモチベーションを高めてほしいと考え、西条市内の五つの高校に依頼して、高校出前講座に取り組んだほか、将来、地域社会に貢献できる社会人になってほしいという思いで、栄養学の講演をしたり、ふるさとへの愛着や誇りを養う目的で、郷土史についてのふるさと講座を実現させたりした。加えて、おやじの会の協力による制作活動と、テレビ

小松
地域未来塾

中学生を含み合計　486名

…実施後の気づき…

1年目
「理想と現実のギャップ」

2年目
「保護者の認知度の低さ」

3年目
「もっと学習時間を！」

市内5高校の出前講座

栄養学・歴史・ライフアップ講座・プラ板づくり

愛大生・教員OBによる学習サポート

ひめころん漫才＆中学生とトーク

等で活躍している芸人とのトークを通じて、多様な価値観に触れたり、夢を叶えるための学びの必要性を考えたりするプログラムも実施した。

公民館を場として、青少年に未来やふるさと、夢などを考えさせ、どのようにチャレンジしていくのかを学ばせていることが伝わってきた。

長尾　堀江公民館では、学社融合を柱として、学校と連携して地区の文化祭や、農作業体験、収穫祭などを実施している。夏休みには、学校の先生方の協力のもとで、学習サポートをしたり、スポーツ協会がスポーツ教室を開いたりしている。また、公民館を拠点に、放課後子ども教室を開設しており、ほりえゆめくらぶ、ほりえ科学くらぶ、ほりえ寺子屋くらぶの三つの取組がある。

その中で、ほりえゆめくらぶは、小学校四年生以上を対象に、まちづくりのボランティア活動や体験活動を通じて子どもの健全育成を図るもので、八年経過した今日では、ＯＢの高校生や大学生も手伝いに帰ってきて、小学生と一緒に活動してくれている事業になっている。この事業は、十年、二十年後のふるさとのリーダーづくりを目指した長期のプログラムで、地域の活動に参画してもらっているのが特長である。さらに、今年からは、公民館を拠点に、中学生

子どもの育成を将来までつなぐ
長期プログラムを実施中!!

ほりえまちづくり中学生ボランティア部

ほりえ科学くらぶ

ほりえゆめくらぶ

ほりえ寺子屋くらぶ

若松　を対象とした「ほりえまちづくり中学生ボランティア部」を結成し、六十六名が入部。地域の方々の指導のもとで、自主的に様々な活動を行っている。これまで中学生がまちづくりに参画していなかったのは、地域づくりに関心がなかったわけではなく、体制が整っていなかったことや、きちんと声が届いていなかったことが原因だと分かったので、そのような取組を画策している公民館関係者は、呼びかけ方や学校との役割分担を工夫することが必要である。

公民館を拠点とし、学校との協働や中学生に対するアプローチ等、長年の取組や工夫が表れていた。

濵田　日常活動と公民館とのかかわりについて、二つの側面から話したい。

一点目は、ＮＰＯ法人八幡浜元気プロジェクトにおいて、公民館と一緒にセミナーを開いたり、公民館で活動している団体の育成支援に取り組んだりすることを通して、連携して八幡浜という地域をよくしていこうとするパートナー的な取組を行っている。さらに、清掃活動やイベントへの協力など、公民館が主催する事業に、ＮＰＯのメンバーが参加することも多い。

二点目は、コダテルでの取組についてだが、現時点では、公民館とのかかわりはない。コダテルは、「会員制ヒミツキチ」と称した個人登録のワークスペース、コミュニティスペースであり、例えば、起業したい、家族

みんなで企てる、ヒミツキチ「コダテル」の会員さん

旅行の計画を立てたい、将来の仕事を見つけたい、多くの人とつながりたい、というような個人の夢や企てなど、多様なニーズの受け皿となる場所である。地元の人が集まってくるだけではなく、宿泊施設も併設しているため、外部の人も集まってきて、地域の方と地域外の方がディスカッションし、アイデアを形にしていくような場所である。単なる「場所貸し」ではなく、企てを実現していくことをサポートする場所である。

二年前からは、出店目標の設定、事業計画・資金計画・仕入れ計画の立案、販売実践、清算等をすべて中高生の手で行う中高生の出店体験＝「中高生チャレンジプログラム」を実施し、中高生の挑戦を支える活動もしており、中高生が公民館とつながりたいと企画すればつなげていく取組を実施している。

コダテルという民営の施設で、これまで公民館が担うことができていなかった地域住民とのかかわり方、サポートへの取組の事例であった。

では、サブ・インタビュアーの二名の大学生に自己紹介と質問をしてもらいたい。

西原　西条市玉津の出身で、愛媛大学法文学部では法律の勉強をしている四回生である。大学では、ＮＰＯ防災リーダークラブに所属し、防災に関する活動に携わってきた。活動内容は、行政が主催する防災イベントへの協力や、各地区の避難訓練への参加、小学校での防災教育等である。

三人に対する共通の質問として、様々な活動を行ってきた中で、子どもたちに好評だった活動、教育効果が高かった活動にはどのようなものがあったか。その理由や工夫とともに伺いたい。

山崎　松山東雲大学人文科学部の三年生で、保育と社会福祉について学んでいる。大学の実習を通じて、人とのかかわりや地域とのかかわりについて考え、コミュニケーションの大切さに気付く機会を得てきた。また、社会教育ボランティア実習として、社会教育施設や保育園、社会福祉協議会に行く中で、子どもからお年寄りまでの幅広い年代の方との交流を大切にしながら、地域と関わっていきたいと活動している。

三人への質問として、多くの活動の中で、活動を共にする仲間や地域の支えが必要だと考えるが、連携の難しさや課題をどのように克服し、新たな目標設定やコミュニティ拡大につなげてきたのか、教えていただきたい。

大学生の二人も、社会教育活動を行う中で、悩みや思いを持っていることが分かった。二人の質問に対し、それぞれ順に答えてほしい。

若松　子どもに一番好評なのは、キャンプや合宿。公民館キャンプの対象である四年生は、在籍児童の半分以上が参加し、カレーづくりや宿泊を楽しむ。また、ゆめくらぶでも合宿をしているが、日帰りの活動にはない食事作りや宿泊の共通体験により、今まであまり関わらなかった友達と仲良くなれるというよさがあり、友達が増えることは、子どもたちにとって、とてもうれしいことだと認識している。私自身、四十年前に、地元の大人が浜辺で子どもを集めてキャンプをしてくれた思い出が忘れられず、今の子どもたちに経験させてやりたいとの思いを実現している。

長尾　活動の仲間づくりでは、運動会の後片付けを熱心にしている父親や、参観日に来ている父親を見つけ、「おやじの会に興味ないか」と近づいてみると、「やってみたかったんです」と、当たる確率が高くなる。仲間を見つけるためには、普段の観察が大事である。

濵田　コダテルでは、高校生会員やインターン生、出店チャレンジの中高生が、大人と自然に関わる中で互いにつながりを作れたこと、学校の垣根を越えた仲間ができたこと等が好評を得ている。また、商売の経験で実際にお金儲けができ、儲けをどこに寄付するかと相談する中で、金融教育ができていることもよかった。さらに、チャレンジプログラム参加者が、「卒業しても地域に帰る場所ができた」「八幡浜で働くには、どんな場所があるのか」などと言ってくれていることから、将来、若者が八幡浜に残るきっかけになれば最高だと思っている。

仲間づくりや地域の支えとしては、チャレンジプログラムに取り組む中高生の手助けをコダテルの会員にしてもらっているということが挙げられる。各会員の特長を見極め、中高生の活動内容に合わせてコーディネートすることで、会員は強みを生かし、中高生は支援が受けられるというように、コダテル自体が人をつなぐ場、仲間づくりの場になっている。今後の目標としては、会員だけでなく、より多くの方に支援してもらえるチャレンジプログラムに発展させたい。準備を始めているのが、地域の大人が、一口五百円の出資をして高校生の留学やインターンシップ等を応援する「マイチャレンジプロジェクト」という取組である。

効果があったのは、市内五つの高等学校による出前講座。西条市内には、西条高校、東予高校、小松高校、丹原高校、西条農業高校の特色ある五つの高等学校があるが、中学生がその特長を知る機会が十分ではなかった。参加した中学生からは、「どんな勉強をしているかが分かった」「考えて勉強することがこんなに楽しいんだ」という声をもらった。また、保護者からは、「どのような勉強をしているかが分かって、不安がなくなった」という声、また、出前講座を行った高校生からは、「人に伝える・教えるのは難しいことだと分かった」「交流の機会にしっかり教えられるようもっと力をつけたい」という声が寄せられた。出前講座は、関わった多くの方々に学びの多いプログラムであった。

他との連携では、私自身は自分でやりすぎてしまうことが多く、連携が下手だと思っていたが、コーディネーターとして三年目に入り、思いを伝えること、お願いすることを意識した結果、周りが「これならできるけん、やってあげらい」「こんな人を呼んできてあげよわい」と多くの人が助けてくれるようになった。「お願い上手になる」ことで、連携が広がっていると思う。

三人三様であったが、公民館は、子どもたちに貴重な体験をさせたり、子どもたちが思い悩んでいることに寄り添ったり、つなげていくことを工夫している様子が伝わってきた。

若松　　處

濵田　ところで濵田さん、コダテルの経営は軌道に乗っているか。

コダテルは、会員制にしているのが特徴で、だれでも来ることができて好きなことができるわけではなく、会員がやりたいことを明確にし、意思表示をしてお金を払っているので、一定以上の質が確保でき、経営できている。

若松　長尾さん、子どもたちに思い出を残す目的でキャンプや合宿をしているが、支える側、スタッフはどれくらいいるのか。

長尾　公民館を会場にする場合、安心できる場所なので、多くのスタッフは要しない。国立大洲青少年交流の家で五〇人規模の合宿をした時には、安全面の配慮から保護者に声をかけ、十五人ほど集まってもらった。万が一事故があった場合の責任に対し、懸念する声もあるので、プログラム内容や人数に応じて対応している。

若松　處さん、子どもたちと活動する中で、ハッとすることはあったか。

處　うれしい意味でハッとしたことは、自主勉強をしていた中学生が、小さい声で「ここが分からん」と言ってくれたこと。「地域未来塾は、あなたのその一言に出会うためにやったのよ。ありがとう」と伝えた。

若松　そのような、子どもの悩みをどう発見するかという視点が、公民館にも必要なのではないかと思う。

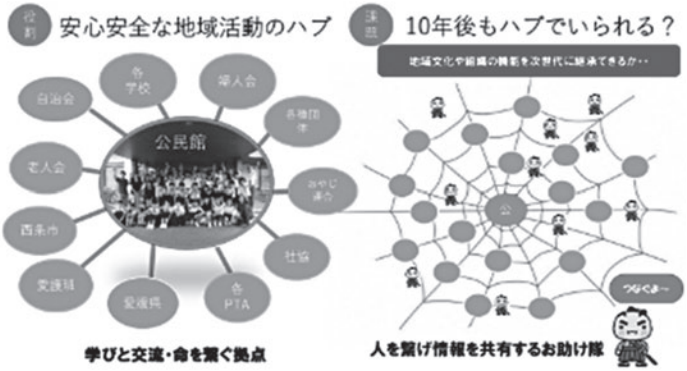
濵田　続いて、「公民館の役割と課題」について、それぞれ思うことを述べてほしい。

公民館は、昔から地域に根付いている組織であり、ネットワーク力、経験値の高さ、設備のよさ、知恵などを兼ね備えており、その役割と影響力は大きい。今、ネットの普及により、ＳＮＳで完結できる関係性が確立されてきていると錯覚している子どもも多くなってきており、現実社会でつながり方が分からないという子どもも多くなっている。そういう子どもたちをどのように取り込んでいくかという課題があると考えており、これまで以上に公民館の役割が重要になってくるのではないかと考える。課題としては、公民館が持つ強すぎるつながりや連帯感が、

若者にとって入りにくいと感じさせているかもしれない。普段は、ほどよい距離感を保ちつつ、災害時やイベント開催時にまとまって、短い期間に、同じ目標に向かってプロジェクトを進めていくような「緩やかなネットワーク組織づくり」をどのように構築していくかが課題だと思う。

公民館の役割は、安心安全な地域活動のハブ・核であり、すでにどの公民館も認識し、取り組んでいることと思う。地域未来塾でも、各学校や婦人会、おやじ連合、市役所など、公民館と関係が深い機関に協力してもらっている。公民館には、調理室やテントなどの備品があり、それらを活用できることからも、核としての役割を果たしてもらい、事業推進になくてはならない機関である。

課題としては、人口減少・若者の都市流出が続いている中で、十年後、二十年後も同じように地域の核としての役割を果たせるか、婦人会などの関係団体が活動を継続できるかということが考えられ、地域活動に主体的に関わる「お助け隊」のような組織をつくり、人をつなげ、情報を共有していく仕組にしていくことを提案したい。人や団体を結び、がんじがらめにしない風通しのよいクモの巣のネットのようなネットワークを運営していくことで、地域の教育力が向上すると期待している。



長尾　若松　山崎

公民館は、住民が安心して集える場所、心豊かに暮らすための学びができる場所であり、これからは、つながりを結ぶことのできる役割が大きくなると考えている。少子高齢化の進む中で、予算や人員が減らされ、公民館の存在意義がかすんできているようにも感じる。公民館が元気で活発に運営されるには、館長や主事等の職員が前向きな発想で生き生きと活動することはもちろん、コーディネーターの存在が必要になってくる。公民館長がまちづくり協議会長を務めている堀江地区では、十四の部会に十四人のコーディネーターが存在し、十四人が責任をもって事業計画・運営を担うため、各部がそれぞれ年に数回は、地域の全住民に案内できる規模の活動があるなど、公民館単独で事業をするよりも数倍の力を発揮できている。まちづくり協議会などの組織がなくても、活動の核になる人との連携を密にして、コーディネーターとして取り込むこと、つまり、公民館が「つなぐ」機能を発揮することで、地域課題の解決や公民館の存在意義を高めることができると考えている。

では、大学生の二人から、意見や質問をどうぞ。

自分自身、小学生のときにはよく公民館を利用していたが、中学生、高校生と進むにつれて、利用が少なくなり、大学生になってからは、唯一、成人式で公民館を使っただけだ。小学生は活動を提供してもらう立場であったが、高校生・大学生は、自分たちで公民館を活用して活動を生み出す立場であるにも関

プログラミング教室に通う地元の小中学生

中高生チャレンジプログラム
チームで出店の打ち合わせ

わらず、利用の仕方を知らないし、活用できていないのが現状。このあたりが問題点であると思った。若者と一緒に活動を生み出すことができれば、公民館活動が活性化すると感じている。

三人に質問したいことは、若者が公民館を活用して地域活性化につなげたいと考えたとき、どのように関わっていけばよいか、お教えいただきたい。

西原　これまでの話の中で、つながりやネットワークという言葉がよく出てきたが、実際にどのような支援や協力がありがたかったか。一方で、もっとこうしてほしかったという課題が残る事例はあるか。

若松　大学生らしいいい質問です。

処　小松地区では、小学校では放課後子ども教室、中学校では地域未来塾があり、公民館に来ることが不自然でない。若者の参画については、押し付けではなく、中学生・高校生のニーズを聞くことから始めるとよいのではないか。つながりの面では、人集めに公民館のネットワークを活用していただいたことがよかった。

長尾　堀江地区では、中学生のボランティア部をつくったことで、それまで部活で忙しく、顔を見せなかった中学生が、よく顔を見せるようになった。若者の活用を促す大人の側、公民館の側の仕掛けが必要だと気付いた。公民館としては発信しているつもりでも、相手に届いていないこともあったようだ。高校生、大学生は、ほりえゆめくらぶの卒業生が地域行事に顔を出すこともあるが、地域のために何かしたいという志を持った若者に出会わないのも現状である。要請があれば共に活動したいという気持ちはあるが、地域の高校生・大学生へのアプローチの仕方が確立されていないこともあり、十分ではない。よい事例があれば知りたい。

つながりについては、公民館は、昔から住民が集ってきた場所であり、だれもが安心して使える施設であるという強みを持っている。これからも住民が気軽に利用できる施設であり、人と人とがつながることのできる場所であり続けてほしいと思っている。

濵田　公民館の使用料金とか、どのような設備があるのかということ等が、大学生や高校生に届いているのかということを検証し、情報を届ける工夫を公民館が行わなければならないのではないかと考える。高校生や大学生も、いいプロジェクト・活動があれば参加したいと思っているため、募集形式にして情報発信していくとよい。また、ボランティア募集やメンバー募集は、様々な機関から出されており、その中で公民館が選ばれる存在になるため、具体的な知識の獲得とか、人脈の広がり、学びの質などのメリットを明文化して届けることが必要であると思う。さらに、若者に居場所と出番を与え、責任を持たせて最後まで遂行させることを大人の責任としてやるとよい。

若松　支援については、公民館の持つ安全性・安心感・信頼・知名度は絶大なものがあるが、もしかすると、場所を利用することしか考えていない住民が多いかもしれない。公民館の強みであるネットワーク力に血を通わせて、コーディネーションしていく機能を発揮することで、さらに認められるのではないかと思う。日ごろから、利用者の困りごとや課題を探り、コーディネーションできれば、もっと信頼される機関になると考える。

公民館の役割と課題についてよい意見交換ができた。フロ

アーからの意見を求めたい。

フロアー　高齢化社会の中での公民館事業の例として、南久米公民館では、機械の扱いやインターネット利用の分野で高校生や大学生にお手伝いしてもらっている。高齢者では扱いにくい機械に対し、高校生は抵抗なく操作できたり、祭りのシーズンには、獅子舞の太鼓を打つ役を高校生が自ら買って出てくれたりと、大変助かっている。敬老会や運動会には、地域に残って就職している若い世代のたちが率先して参加してくれて、高齢者ではできない作業を手伝ってくれ、事業を盛り上げてくれている。そういう若者は、小学生のときから、親と一緒に行事に参加していた人たちで、小さいころから、公民館活動に参加してもらえることが、将来につながっていると感じている。（大洲市公民館長）

フロアー　濵田さんの発言の中に、「公民館は貸館のみでなく、他の機能もある」というものがあったが、他の機能についてもっと掘り下げていただきたい。（今治市行政職）

フロアー　高校生とのつながりのつくり方として、市のボランティア協会との連携で、近隣の高校生に参加してもらっている。また、直接高校の校長先生に依頼し、協力してもらうことも多い。（四国中央市公民館長）

長尾　例えば、高校生によるスマホの使い方講座などはどうか。若者が高齢者に教えることで、異世代交流ができる。また、西条市でもSSC（西条市市民活動支援センター）に高校生が学びに来ており、その学びの一環として公民館からボランティア募集を行ってみるのもよいのではないか。

濵田　小学生から、公民館に通い慣れ、楽しかったという実体験をさせることは、二十年後、三十年後の人材育成の意味で大切だと考えている。高齢者の参加としては、高齢者の数は増えているにも関わらず、高齢者の方が世話をすることに疲れて、離れてしまうようなことがあり、高齢クラブの参加者は減少している状況もあるようだ。その課題に対しては、もう一つ若い世代がコーディネートする、仕掛けをつくる側になるとよいと考えている。公民館の機能としては、高齢者と子どもが一緒に活動できる場をつくる、増やすことで、公民館の有効利用が広がると思う。

濵田　中高生、大人を含めたネットワークの見える化に取り組むことが大事だと思う。一人一人の特技や強みを公民館が把握し、それらを生かした事業を打ち出すこと、そして、お手上げ方式で、様々な世代が参画できれば、活性化すると考えている。例えば、めぐり逢いマップと名付けて、公民館に顔写真が貼ってあり、得意なことが記してあるような取組も面白いかもしれない。

若松　各自、まとめとして、公民館の人たちへのメッセージを。

濵田　公民館も選ばれる時代になる。この公民館を使いたいというファンづくりをし、エリアを超えて、他地域からも人が来るような、公民館同士の切磋琢磨が起きるような流れになれば、公民館の価値はもっと上がると思う。

長尾　「居場所と出番が『生きる喜び』、だれでも人の役に立てる」と提言したい。子どもや高齢者を守ってあげるとか楽しませてあげるイベントもいいが、高齢者、障がい者、子どもなどだれでもが、人の役に立てるという喜びを実感できる場所に公民館がなれるよう工夫をしてほしい。子どもはお客さんではなく、まちづくりを担う一員だという自覚を持たせられるようなアイ

デアあふれる活動をつくっていきたいと考えており、地域の人から感謝されることに生きがいを感じる多くの世代の住民を増やしていきたい。ここにいるみなさんと一緒に頑張っていきたい。

芽が出る可能性がある限り、種をまき続けたい。この地域で育ってよかったと思える住民を一人でも増やしたい、そのための努力を惜しまない人間でありたいと思っている。だから、これからも、笑顔で、ちょっと無理をしながら、前向きに進んでいきたい。

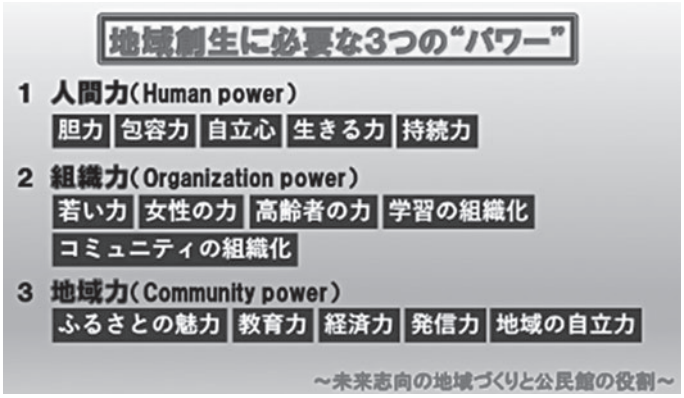
濱田さんから、公民館が魅力をつくり、発信し、選ばれる時代になるという提言を、長尾さんからは、館長・主事だけでなく、住民がコーディネーターになって住民同士をつないでいく素晴らしさの提言を、處さんからは、未来の種を撒き続けること、十年後、二十年後の公民館の姿を想像して、今、頑張ることの大切さについて提言していただいた。

私からの提言として、「地域創生に必要な三つのパワー」について述べたい。

一つ目は、人間力。公民館関係者自身が学び続け、胆力、包容力、自立心、生きる力、持続力を身につけていただきたい。

二つ目は、組織力。若い力、女性の力を生かす発信を積極的に行い、組織化していく仕掛けをし続けなくてはならない。

三つ目は、地域力。ふるさとの魅力、教育力、経済力、発信力、地域の自立力をつけることで、未来の地域にとって、公民館が欠かせない存在として輝き続けられると思う。若い人たちからの言葉をそれぞれが自分のこととして受け止め、明日からの公民館活動に生かしていただきたい。



インタビュー・ダイアローグのアンケート集計結果

（回答者数二百七十五　回収率　六十三％）

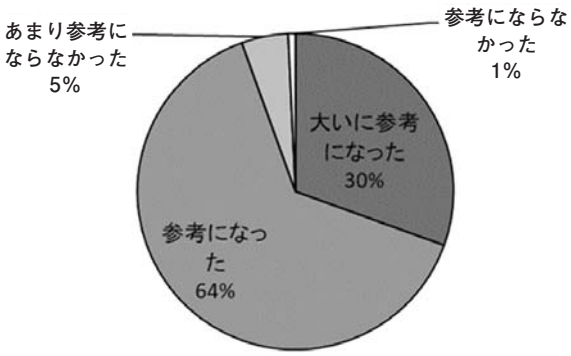
大いに参考になった	八十三
参考になった	百七十四
あまり参考にならなかった	十三
参考にならなかった	二

インタビュー・ダイアローグの感想・意見　自由記述

・高校生、大学生など若者を公民館活動に取り込むという発想は、目からうろこであった。参考にしたい。

・　若い人たちが、公民館や地域活動に興味関心を持つために、何をすべきか考える機会となった。
・　十年後、二十年後を目指し、三世代（子どもから高齢者まで）のつながり、絆づくりが、非常に大切である。
・　公民館を利用する立場の方から気付く公民館の課題が、とても参考になった。種をまいて、また、子どもたちが活躍できる場としてこれからどう取り組んでいくかを考えて実行していきたいと思った。
・　登壇者の三人の方には、意欲や行動力を強く感じた。地域の子どもや中学生への取組は理想とするところだ。
・　地元の公民館を使い、いろいろな活動を行っているのが参考になった。子どもたちが集まる公民館になるように工夫したい。
・　公民館を小中学生と大人のものから若者のものへと、少しでも変えていけそうなアイデアを得たような気がした。
・　コミュニティの大切さ、地域とのつながり、かかわり方の必要性を考察できた。
・　公民館の活動の内容、人の集め方、組織、意欲のもたせ方等、今後、大いに利用したい。
・　この全体会で学んだこと、知ったことを自分の公民館の現状をふまえてどのように反映できるかが課題だと思う。
・　魅力ある公民館、選ばれる公民館づくりに大いに期待している。
・　大学生のサブ・インタビュアーの方の質問について、濱田さんが

全体会インタビュー・ダイアローグの評価
（R元）



強く繰り返された意見が、参考になった。
・　今勤めている公民館にも同じ課題があり、ゆっくりと振り返ることができた。次のヒントも見つかり、実践につなげようと思う。
・　インタビュー・ダイアローグで大学生の若い意見が聞けてよかった。三人の発表もそれぞれの場所で地域の活性化ができていると思う。
・　活動を通じての発言で説得力があり、大学生の質問も素朴さがあり、好感が持てた。人間力、組織力、地域力を感じる。
・　若松さんが上手に司会進行しておられ、サブ・インタビュアーの西原さん・山崎さんが若いのに大変しっかりしていて、頼もしかった。
・　若松進一さんのしゃべりは、いつ聞いてもいい。
・　若い人たちの意見も聞くことができてよかった。インタビュアーの進行がすばらしく、時間が経つのを忘れそうだった。
・　若松さんが言われていたように、公民館関係の方ではない人が公民館のことを語るという違った視点で進むのがとても面白かった。初心に返る的な感じもした。まとめるのも登壇者への投げかけ方もとても上手ですばらしい。
・　成功事例が多く、今後の参考にはなったが、地域性もそれぞれのため、全てがあてはまる訳ではないと感じた。失敗事例等があれば聞きたいと思った。
・　まとめて質問し、まとめて回答するよりも、細かくかけあいのようにする方がインタビュー・ダイアローグの形式には合っている気がする。

【分科会】

分科会の様子

〈分科会A〉 テーマ「高齢者が活躍する地域づくり」

運営責任者　愛媛県公民館連合会理事　石丸　修
会場責任者　西条市中川公民館主任主事　黒川　景子
助　言　者　今治市乃万公民館館長　池田　久志
司　会　者　砥部町中央公民館係長　谷口　佳子
発　表　者　愛南町一本松公民館主事　嘉新　満雄
　　四国中央市松柏公民館館長　片岡　俊助
記　録　者　愛南町西浦公民館主事　吉田　秀彦

〈分科会B〉 テーマ「安全安心な地域づくり」

運営責任者　愛媛県公民館連合会理事　青野　栄一
会場責任者　西条市壬生川公民館主任主事　近藤　正
助　言　者　松山市自主防災ネットワーク会議副会長　小笠原貴久
司　会　者　内子町立五十崎自治センター館長　大久保裕記
発　表　者　松山市高浜公民館館長補佐　蔭原　政徳
　　宇和島市立高光公民館主事　有友　克明
記　録　者　上島町弓削中央公民館館長　梨木　善彦

〈分科会C〉 テーマ「地域の特色を活かしたプログラム開発と評価のあり方」

運営責任者　愛媛県公民館連合会理事　木下　惠介
会場責任者　西条市玉津公民館館長　川上　善秋
助　言　者　松野町目黒地区公民館館長　岡部　暢雄
司　会　者　伊予市中山地区公民館館長　武智　亨
発　表　者　西予市三瓶北公民館主事　安藤　彰祥
　　新居浜市立口屋跡記念公民館館長　高田　憲二
記　録　者　東温市川内公民館主事　田村　祐治

〈分科会D〉 テーマ「学校との連携・協働」

運営責任者　愛媛県公民館連合会理事　近藤　照雄
会場責任者　西条市石根公民館館長　水野　太望
助　言　者　八幡浜市立白浜地区公民館館長　中島　和久
司　会　者　新居浜市立泉川公民館館長　真鍋　智明
発　表　者　松前町東公民館主事　東山　伸也
　　伊方町中央公民館主査　山田　りか
記　録　者　宇和島市立明倫公民館主事　中村恵美子

〈分科会E〉 テーマ「人権意識を育てる公民館活動」

運営責任者　愛媛県公民館連合会理事　本宮　圭治
会場責任者　西条市周布公民館館長　武田　聡
助　言　者　四国中央市天満公民館館長　秦　英治郎
司　会　者　大洲市中央公民館主事　田中　宏明
発　表　者　西条市三芳公民館館長　寺町　恭三
　　久万高原町公民館西谷分館館長　山本　眞人
記　録　者　西予市明間公民館主事　兵頭　大河

【分科会協議記録】

分科会A「高齢者が活躍する地域づくり」

1　発表要旨

○愛南町一本松公民館　主事　嘉新　満雄

「活躍できる高齢者（人）づくり」

1　一本松地域の概要

2　公民館事業の紹介

(1)　生きがいづくり

(2)　健康づくり

(3)　交流の場づくり

3　幅広い年齢層へ

2　質疑応答・グループ協議

Q　第十九グループ

花づくりの呼び掛け方や参加の仕方、活動の時間帯、資金はどのようになっているのか。

A　愛南町一本松公民館　主事　嘉新　満雄

花壇十四か所、それぞれ世話をする団体を割り振っている。小・中学校は授業の一環として位置付けており、授業時間に行うなど、時間帯はそれぞれの団体に任せている。水やりは、「花と夢咲く県境のまち推進委員会」の副委員長と主事とで全花壇を回っている。

「花と夢咲く県境のまち推進委員会」に対する町からの補助金から、苗代、肥料代、ボランティアへの飲み物代に使っている。国交省の事業（オレンジロード事業）の補助金から、肥料代も出している。

Q　第四グループ

花づくりの苦労や工夫はあるか。また、スマホ教室について、参加者や指導者の反応はどうか。

A　愛南町一本松公民館　主事　嘉新　満雄

花づくりを始めた時は人集めが不安だった。自分の地元でもあり、少しずつ声を掛けていった。今では花づくりが好きになり、苦労と感じていない。ボランティアに来てくださった方にフラワー教室を案内するなど持ちつ持たれつの関係にしたり、活動時に次の予定を知らせたりするようしている。九十三歳の方も自分の生きがいとして取り組んでくださっており、そういう方が増えることを願っている。

スマホ教室の反応は大変よく、「少しできるようになったよ」とか「またしてほしい」「次はこんなことがしたい」という声が聞けたので、今後も続けたい。講師は、知り合いでもある愛南町の「えひめＣＡＴＶ」の方に頼んだところ、快く引き受けてくれ、社員四名が来てくださった。

Q　第三グループ

交流グランドゴルフ大会は、一本松の公民館区内のものか、他地域との交流大会なのか。世代を越えての交流大会についてはどのように考えているのか。

A　愛南町一本松公民館　主事　嘉新　満雄

一本松・正木・上大道の三館合同で、これらの地区の老人クラブ、高齢者を対象に行った。世代を越えてのスポーツ大会は、一本松公民館区で開催したいと考えている。

Q　第一グループ

壮年グループ連絡協議会も含め、新しいメンバー、特に若い世代を増やすためにどのようにしているか。また、「壮年グループ連絡協議会のメンバーは微増」と言われたが、どの辺りの年齢層が増えているのか、それをどのように把握しているのか。

A　愛南町一本松公民館　主事　嘉新　満雄

年ごとに年齢層がスライドしており、微増とは高齢者のこと。壮年グループは自分が小学生の頃にできた。そこで育った者は各地区にこの組織や活動があって当然と思っており、自然と加入している。人口減少に伴い今以上にメンバーが増えることはないと思っているので、つながりを深めたい。十四か所それぞれで花植え活動をする際には自分も参加し声を掛けているので、活動に関するアンケートは取っていない。来ている方が周りに声を掛けてくれて新しい方が参加してくれることがある。活動には自分も必

ず出向いており、初めて来る方がいれば分かるので、そういう方がどんどん増えるとうれしい。

3　発表要旨

○四国中央市松柏公民館　館長　片岡　俊助

「子どもは地域の宝、高齢者は地域の財産」

1　松柏地区の概要
2　高齢者の活動状況
3　世代間交流行事
4　老人クラブ等による自主的な活動
5　成果と今後の課題

4　質疑応答・グループ協議

Q　第二グループ

芝生化された経緯、芝生化のメリットやデメリット、維持管理について教えてほしい。

A　四国中央市松柏公民館　館長　片岡　俊助

平成二十五・六年頃、行政で公有地等の芝生化を推進する事業が立ち上がった。小学校から運動場を芝生化したいという相談が地域にあり、地域として学校に協力することにした。小学校の校庭は七千平方メートルあり、土壌改良から取り組んだ。芝生を植える際には、二千人規模が必要で、各種団体に呼び掛け、みんなで植え付けを行った。当地区は団結力があり、決まったことを皆に周知すると、どの団体も協力してくれるよさがある。維持管理の予算は市から出ている。地域の人も協力的に動いているが、学校の先生方やＰＴＡのボランティアが主となって維持管理をしている。人手がいる作業なのでいつまで継続していけるか心配である。できるだけ長くきれいな芝生を維持管理できるよう、みんなで協力していきたい。

Q　第十三グループ

運動会の選手集めはどうしているのか。地区対抗なのか、商品等に係る多額の資金などはどのようにしているのか。

A　四国中央市松柏公民館　館長　片岡　俊助

運動会で主になるのは愛護班。五地区ある愛護班の各地区代表に来てもらって実行委員会を立ち上げ、参加を促している。昭和三十三年に、体協のメンバーが公民館を助けるために町民運動会を始めてくれた。その際、地域の企業を回り活動資金を集めてくれた。各自治会、地区社協、市の予算からもお金は入るがそれだけでは足りないので、企業回りをして集めた寄付金の占める割合が大きい。

競技は五地区対抗。ただ、地区によっては子どもが少ないところもあるので、合同でなければできない状況になってきている。

Q　第十八グループ

公民館単独事業には何があるか。他の事業はどのように資金を得ているのか、内訳等教えてほしい。

A　四国中央市松柏公民館　館長　片岡　俊助

公民館の主要事業は、町民運動会、ふるさとまつり、公民館まつりの三つ。体協の方が年度当初に企業を回って集めてくれる寄付金が七十万円ほど、市の補助が三十万円、各地区からの寄付金が二十～三十万円、合わせて百二十万～百三十万円を三つに振り分けて運営している。たくさんの企業がある地域で、市内でも大変恵まれている。三世代交流会やしめ縄づくりは、地区社協の予算が出ている。

Q　第三グループ

老人クラブの加入者数や加入率、加入を促進する工夫を教えてほしい。

A　四国中央市松柏公民館　館長　片岡　俊助

六十五歳以上の人口が一九四四人、そのうち、老人クラブの加入者は一三五人。どこの地域も同じだと思うが、老人クラブになかなか入ってくれず大変厳しい状況。各地区の会長さんも苦労しているのが現状。

Q　第十一グループ

今後の課題として、「参加しやすい状況や環境をどう整備していくか…」とある。現段階でのビジョン、展望を教えてほしい。

A　四国中央市松柏公民館　館長　片岡　俊助

ビジョンはないが、今頑張ってくれている七十～八十代の高齢

者の方はとてもよくやってくれている。それ以下の高齢者の方々をどう呼び込むかが課題。各地区の地区長、副地区長、市議会議員、学識経験者で構成する松柏地区協議会に提案し、解決策を見出していくことが今できることである。

5　指導・助言

○助言者　今治市乃万公民館　池田　久志

どこの公民館も、事業をする上で人集めと資金の問題が生じてくる。防災では、「自助、共助、公助」とよく言われているが、最近では、「自助と互助、共助、公助」と言われている。自分の命は自分で守ることを強く言われており、公助は最後の最後。お金を出すとか何かあった時に助成や補助をする。まずは自助である。人集めということで、一本松公民館のように九十三歳の方が率先して出てくれる。そういう方がおられると非常に心強い。それが互助である。近所の方とか周りの方を連れて逃げる。その後、公民館の公助。しかし、私は、公民館の役割は公助というより共助に近いように感じている。地域の中で中心となり、いろいろなことを地域の方と一緒になってやっていく。公助というよりは共助に半分くらいはなっている。私も地元でいろいろなことをするが、地域の中で活動している方々に協力してもらうことが多い。ゲートボールやグランドゴルフの練習などには必ず顔を出すようにしている。人と人とのつながりが公民館の大きな役割だと思う。また、公民館に図書があり、子どもたちがよく借りに来る。その時には必ず声を掛けたり、時には非売品や景品の余りなどをあげたりして、普段からつながりをもっておくと、公民館によく来てくれるような感じがする。

まとめにはならないかもしれないが、資金がある松柏公民館がとてもうらやましいというのが正直なところである。一本松公民館については、主事さんが花づくり事業を苦に感じていないところがすばらしい。公民館の仕事は、仕事として考えるとなかなかできない。地域に溶け込み、仕事というよりは趣味的な気持ちでやればうまくいくように感じる。

分科会分科会B「安全安心な地域づくり」

1　発表要旨

○松山市高浜公民館　館長補佐　蔭原　政徳

「地域における防災と連携」

1　はじめに
　(1)　高浜地区の概要
　(2)　高浜公民館
2　地域と防災
　(1)　自主防災会
　(2)　活動内容（連合会として）
　ア　標高表示板の設置
　イ　防災マップの作成・配布
　ウ　ハザードマップの作成
　エ　緊急指定避難場所案内看板の設置
　オ　防災出前講座
　カ　防災学習
　キ　防災訓練
　ク　地区防災計画
　ケ　要支援者対策
　コ　地域の連携
3　今後の課題
　(1)　防災意識の啓発
　(2)　町づくり協議会

2　質疑応答・グループ協議

Q　松山市浅海公民館　館長　安永　好男

要支援者については、調査の台帳等の作成をしていると報告があったが、要支援の基準というのはどういった形で決められているのか。また、高浜地区はいろいろな取組をされているが、隣接している他の公民館との連携等について取り組む用意はあるか。

A　松山市高浜公民館　館長補佐　蔭原　政徳

まず、要支援者の基準については、松山市の資料では独居高齢者がメインとなっている。ただ、高浜地域で調査した内容は「要

支援者」「独居高齢者」ではなく、普段から「何かあった時には支援をお願いします。」といった意見を全て吸い上げようとしている。例えば、若いお母さんが「昼間は子どもだけしかいないから何かあった時にお願いします。」といった例や、また、病気の方がどんな薬を飲んでいるかというところまで、できる限りの把握に努めている。市が行っているよりは、狭い意味での支援者ということである。とりあえず希望を募り「何かあった時は」と言われた方を把握している。

他の公民館の連携については、なかなか難しい。話をすることはあるが、連携して訓練を行うまでには至っていない。

Q 松山市地域学習振興課　副主幹　毛利　雄一朗

二点質問がある。一点目は大きな災害避難の防災イベントをするときに、多くの人をどうやって集めているのか。二点目は自主防災という形であれば、公民館はどのような形で向き合うべきなのか意見を聞きたい。

A 松山市高浜公民館　館長補佐　蔭原　政徳

大災害時、避難所運営は長期になる。また、台風や豪雨は長いスパンの避難が必要ない場合が多い。避難所を開設するにしても、短期の場合と長期の場合と二つの方法を考える必要がある。訓練の人集めでは、最初は少人数で行いながら参観日等の行事を利用して訓練を行い、保護者や先生、地域の人々も集まるような場所で地道に続けていると地域の意識が高まってくる。意識が高まってきたところに集まってもらうというのが一つである。また、町づくり協議会については、その中に四つの企画部を入れている。その一つに防災安心安全企画があり、今までやってきたことをやりながら、もう少し活動を広くしていくつもりである。公民館は町づくり協議会の中でも立ち位置は変わらないので、そのままやっていく。町づくり協議会は、あくまでも地域がやっている横の繋がりをいろいろなところから共有して、今まではバラバラでやっていたことを皆で取り組むという活動をしている。そこにどのように協力できるかということである。

3　指導・助言

○松山市自主防災ネットワーク会議　副会長　小笠原　貴久

地区防災計画は国、県、地区という順番に策定をしている。近年もそれを率先して作る中で、訓練計画や災害発生の際にはどうするのかということが盛り込まれている。地元に帰られたら、参考までに地区防災計画を作ることをしてもらえたらと思う。

意識の啓発について、どこも苦労しているところである。防災訓練をやって、来ていただける方は問題ないが、一番注目をしないといけないのは参加してない方である。その方にどのように意識啓発をして参加してもらえるようにするか。それが最終的に発生時の一番のポイントになる。神戸の震災の時、私も後日支援に入った。公助、共助、自助の観点から考えると、公助については、消防、警察、自衛官はどうしても起動が遅れてしまう。共助は、隣近所で行うことになる。それよりまずは、自助ということで皆さん自身が自分の安全を確保した上で、近所の方々を助けるということになる。神戸の震災時には、三万七千名ぐらいの方が生き埋めになったが、そのうち二万七千名ぐらいの方は近所の方が助けた。公助で消防、警察が助けたのが七千九百名ぐらいだったと思う。結局、現実には、まず自分の安全を確保したうえで、隣近所の方に頼るしか方法がない。消防団員の我々も自分の生活と安全を確保した上でしか活動に参加できない。警察・消防等も被災するかもしれないと考えると、そういう時に一番頼りになるのは隣近所の力ということになる。公民館に関わっている方は地元のことに詳しい方ばかりなので、防災計画立案時に、要支援者登録を行う中で、「この人のところには誰が行く」という具体的な計画を作っていただくことが、最終的には地区防災計画の核になり、そういう過程を経ることが、災害時には一番力になると思う。訓練等の依頼については、先ほどの話と重複するが、他県で幼稚園・小学校の子どもと保護者を対象にアンケートを取った事例がある。アンケート項目はたった一つだけであり、「お子さんが学校に行っているときに、地震等があった時どうしますか」というものである。子どもたちのほとんどは、「お父さんもしくはお母さんに連絡する」という回答で七割以上であった。保護者は、八割以上の方が「子どものところへ行く」という回答結果になってい

た。こういう事例を踏まえると、そこから参加を募るポイントが判明するのではないかと思う。どの地区にも子どもがいる。要支援を含め、その方々をどうするのかという意識の啓発をしていけば、参加者等の増加につながるのではないのかと思う。最終的には一つの小規模団体で、自助で必ず助け合うことが一番必要だ。地域で元気に動ける方ががんばり、全てのことをやるという考え方もあるが、その核になる方は、公民館長や地区の会長であることが多い。しかし、そういう方々もいつまでもその職責に就いているわけではない。そういう方がもし代わった場合に活動が停止しないように、終息しない形式のプログラム化を行い、誰に代わっても実施できるようにすれば、将来的に安全で安心できる地域づくりにつながっていくと思う。このことを皆さんに実行していただきたい。

4　発表要旨

○宇和島市高光公民館　主事　有友　克明

「高光地区自主防災訓練・産業まつり」

1　地域の概要

2　自主防災に関する経緯

3　昨年の豪雨災害における高光地区

4　その他の取組

(1)　高光春季・秋季防犯パレード

(2)　一人暮らしの高齢者訪問事業

5　今後に向けて

5　質疑応答・グループ協議

Q　第一グループ

二次避難場所である高光小学校のグラウンドには、四百名あまりの地域住民が集まるとのことだが、一次避難場所にはどのくらいの人数が集まるのか。また、自主防災訓練で参加しない方々はどういった方か、毎年ある程度決まった方が参加しないのか教えてほしい。

A　宇和島市高光公民館　主事　有友　克明

一次避難場所と二次避難場所の人数については、おおよそ同数である。ただ、一次避難場所だけ来て帰る方も当然いる。また、一次避難場所に行かずにいきなり二次避難場所に集まって来られる方もいる。次に、どういった方が参加して、どういった方が参加しないのかについては、避難されて来た方を全てチェックしているわけではないので、分からない。中には役員の年には参加し、役員が終わったら次の年は参加しない方がいる。また、役員を経験したことで、いいことをしていると感じている方もいる。

Q　第九グループ

一か月ほど施設で過ごされた方がいるということだが、施設の整備が整っていない場所に長期的に避難することについて、対応策はあるか。

A　宇和島市高光公民館　主事　有友　克明

一か月避難していると、事務室に怒鳴り声が聞こえてくる等、避難者が不安定であることが多々あった。そうした時には、様子を見に行き、積極的に話しかけた。館長が、自分の家から使わなくなったテレビや自転車を持ってきて、それを避難者の方に使ってもらった。

Q　松山市東雲公民館　運営審議会委員長　仙波　一平

十地区ある自治会ごとに定めている集会所というのは、安全な場所にあるのか。

A　宇和島市高光公民館　主事　有友　克明

大体が安全な場所だが、絶対に安全とは言い切れない。先ほど高浜地区の発表で、一次避難場所の安全チェックを行ったという話を聞いて、私たちにはそれが少し足りないなと感じた。

6　指導・助言

○松山市自主防災ネットワーク会議　副会長　小笠原　貴久

私の地区では訓練時にアンケートを行っており、その際、年齢、性別、地区を記入してもらい、それをデータに集積している。また、高齢者問題については、松山市でも、災害時の要支援者名簿を作成している。愛媛県、松山市、各自治体がハザードマップを必ず作っている。一番に知ってほしいのは、自分の地区の特性である。先日も台風十九号で河川等が氾濫したり、決壊したりした。愛媛県で河川の氾濫は肱川や西条等でも過去にあった。昔は土手が低いので、

河川氾濫が多く、周辺に住んでいる方は、非常に防災意識が高かった。しかし、最近は河川工事等で土手のかさが高くなり、水は来ないだろうと思っている方が多くなってきた。今回のような雨が降ると、堤を超えてしまうこともあり、そのことはハザードマップにも出ているので、自分の住まいにおいてどういうことが想定されるのか知ることが大事である。訓練についても話題になっていたが、地域の特性があり、中山間部、市街化地域、河川付近、沿岸部、それぞれ訓練の内容は違うはずである。この西条市も沿岸部は愛媛で一番低地が多い。そこに住んでいる方は、どこに避難するか普段から会話をされていると思う。しかし、隣近所、地域の中でそういう会話をするかというと意外にその割合が低い。また、訓練参加者が少ないことは、どこの地域でも大変な悩みである。訓練は実は無駄だと思っている方もかなりおられると思う。しかし、無駄な訓練が本番の時に生きる。実際に、我々が消防団の訓練をしても本番にそれ以上のことができるのかというと、訓練でしたことまでしかできない。もしくは、訓練の半分までしかできない。そのため、地域の方にも訓練に参加の折に、「無駄かもしれないがこれはやってほしい。」「やったことしかできない。」ということを伝えることで意識を啓発することができる。

最後になるが、昨年から災害時の避難について、五段階で発表するようになった。今回の災害も五段階の一番上の段階であり、これは命を守る行動を取らなければならないということがテレビ等で放送されていた。そういう情報は愛媛県の「ひめシェルター」というアプリやテレビのdボタンを押すと見ることができる。各自治体でも行っていると思うので、その情報収集の方法を分かりやすく周りの方に説明することも大切である。皆さんは、携帯電話を持っていると思うので、そこから情報を得るということから始めていただきたい。しかし、避難情報に頼りきりにならないようにすることも大切で、自分の目で見て危ないと思えば、その時点で避難指示や避難勧告が出ていなくても先に動くことで、被災しないようになると思う。

分科会C「地域の特色を活かしたプログラム開発と評価のあり方」

1　発表要旨

○西予市三瓶北公民館　主事　安藤　彰祥

「地域の特色を生かした公民館活動」

1　三瓶地域の概要

2　取組事例

(1)　自然環境の特性を生かした事業

ア　アドベンチャー三瓶

イ　SUP教室

(2)　地域住民のつながりを深める事業

ア　須崎健康ウォーク

イ　パパイヤづくり

ウ　平成展

エ　家庭教育講座

3　評価のあり方

4　終わりに

2　質疑応答・グループ協議

Q　新居浜市新居浜公民館　館長　高田　実

参加する子どもが約三十名と大人数いる中で、公民館の職員だけでは事業運営は困難だと思われるが、子どもたちの安全をどのように確保しているのか。

A　西予市三瓶北公民館　主事　安藤　彰祥

海で手作りのいかだを浮かべるということなので、細心の注意を払って運営を行っている。沖に行かないようにコースを設定し、漁船を二隻借り、市の職員で免許を持っている方が待機し、万が一の事態に備えている。基本的には職員を中心に準備を行っているが、外部講師に依頼する等、負担軽減を図っている。PTAの方の協力はなく、スタッフは約二十名で運営を行っている。

Q　八幡浜市立川上地区公民館　主事　楠　理恵

SUPに使う道具はどこから借りているのか。

A　西予市三瓶北公民館　主事　安藤　彰祥

講師の方と愛好家の方が所有している道具を借りている。例年

十艇程度用意している。

Q 松山市余戸公民館　館長　戸井田　樂

地域に財産がない場合はどうしたらいいのだろうかということで話し合った。地域に財産がないのではなく、地域の魅力を自分たちで掘り起こし、「魅力あるプログラムの開発につなげていく」という作業が重要ではないかという意見が出た。アドベンチャー三瓶は、どのような経緯で発案されたのか。

A 西予市三瓶北公民館　主事　安藤　彰祥

当初は三瓶町だけで募集をかけて実施していたが、小学校でも大洲青少年交流の家で宿泊体験を行っており、内容が重複するということで、閉校した学校を活用し、自分たちで企画して子どもたちを集めてキャンプを始めたのが今の形である。

○　第一グループ

海という地域の特性を活かした活動（いかだづくり・ＳＵＰ）が魅力的で、今後の参考にしたい。少子高齢化が進む中で学校だけで運動会、講座等を実施することが難しくなっている地域がある。例えば、運動会では小学生より地域の方が多い地区があったりすることから、地域全体でどの事業も力を合わせて実施できるようになれば、もっと地域の力もついていくのではないかという感想が出た。

○　第四グループ

自然が豊かであるという環境を生かした活動が素晴らしいと感じた。子どもの数が少なくなり、事業運営に苦労していると思うが、公民館合同での活動が参考になった。評価について、私たちも運営審議会で話をしているが、新たな活動についての意見が出ておらず、結果だけの報告になってしまっているので、次の活動に繋がる報告会にしていきたいという意見が出た。

○　第七グループ

自然の特色を活かして事業を上手くやっているなと感じた。私たちの地域では、一・二年生は日帰り、三・四年生は一泊、五・六年生は二泊と学年の成長に合わせたキャンプを行っており、西予市の活動を聞き、子どもを連れて行ってみたいと思った。私たちも年二回の運営審議会で評価を行っているが、年二回では少ないので、もう少し意見を出す機会を増やしていけばいいのではという意見が出た。

3　指導・助言

○松野町目黒地区公民館　館長　岡部　暢雄

自然環境を活かした事業として異なる年齢集団による交流や他の公民館とも交流を行うことができて、子どもたちの成果にもつながる事業だと思った。私の地域でも閉校した学校があって、その活用を問題視しているが、三瓶北公民館での活用方法は魅力的に感じた。私の公民館でも閉校になった学校を利用し、自然の活用と世代を超えた交流として、蛍の畦道ライトアップを行っている。年々利用者が増加しており、地元出身者が帰ってくる等、地元を代表するイベントとなっている。地域住民の絆を深める事業は健康づくりや子どもたちとのつながりを深めることができる事業だと感心した。特に家庭教育講座は、一公民館だけでなく町内三公民館において実施をしている事業であり、大変勉強になった。また、住民の健康づくりを目的とした須崎健康ウォークは、自然を感じながら健康推進につながるイベントとなっており、私たちの町でも実施できるよう検討していきたいと感じた。三瓶北公民館の各種事業は地域の自然を活かしながら世代間の交流ができるものが多くあると感じた。今後とも評価委員会における意見やアンケート等を生かし、参加者が有意義に思える活動を推進していただきたいと思う。

4　発表要旨

○新居浜市口屋跡記念公民館　館長　高田　憲二
　　主事　黒部　公子

「地域の特色（宝）を活かしたプログラム開発と評価のあり方」

1　宮西校区の概要

2　地域の特色（宝）を活かした取組の概要

(1) 見守り活動

(2) 読み聞かせ

(3) 北中校区子ども絵画展

(4) 伝統文化の継承活動

(5) 口屋あかがねプロジェクト事業
3 「口屋あかがねプロジェクト事業」について
4 今後の課題
5 終わりに

5 質疑応答・グループ協議

Q 第六グループ
地域の歴史等を学ぶ学習として、副読本と散策マップを、誰がどのように作成したのか。

A 新居浜市口屋跡記念公民館　主事　黒部　公子
学識経験者、新居浜の事を昔から知っている方等を集め編集委員会を結成し作成した。関わっているのは、一般の方だけだが、印刷だけは業者に委託した。

Q 第六グループ
ジオラマ、副読本の作成費の金額はどの程度か。

A 新居浜市口屋跡記念公民館　主事　黒部　公子
国の社会教育活性化支援プログラム助成金を活用し、地域振興という形で二年間助成を受けた。費用として百万円程度の金額となっている。三年目は三つのジオラマを作り、予算として市役所の公民館に対する委託事業のプロジェクト事業で費用を工面した。

Q 松山市余戸公民館　館長　戸井田　樂
副読本はどのくらいの部数を印刷し、配布方法はどのようにしているのか。

A 新居浜市口屋跡記念公民館　館長　高田　憲二
二千部程度印刷しており、地域の小中学校、地域の自治会、市内のサークル等に配布している。また、市外の中学生等が歴史の勉強で公民館を訪問したときに配布している。

Q 大洲市肱南公民館　館長　森永　茂
口屋という地名に意味があるのか、また、くちやあゆみの会、口屋あかがねの会の構成委員を聞かせてほしい。

A 新居浜市口屋跡記念公民館　館長　高田　憲二
色々諸説あるが、幕府の管轄する出入口の門が口屋ということで、新居浜にも昔、幕府の管轄する出入口の門があり、口屋という名前が残って現在の地名になったという説がある。

A 新居浜市口屋跡記念公民館　主事　黒部　公子
くちやあゆみの会は、本を作ることを中心として、これを後世に伝えていったり、生涯学習大学等で講師になったりして、口で伝えていく。口屋あかがねの会は、ジオラマを見せてそれに歴史を重ねて説明していく。市とのかかわりは、各公民館に市から出る委託事業のお金があり、まちづくり推進委員会は宮西校区の会である。

Q 宇和島市立御槙公民館　主事　矢儀田　雅幸
くちやあゆみの会、口屋あかがねの会の構成員との年齢層を教えてほしい。また、高齢化が進み、若手が少ないという現状を保存会からよく耳にするが、どのような形で活動をされているのか。

A 新居浜市口屋跡記念公民館　主事　黒部　公子
くちやあゆみの会は、昔を知る人が必要なので、六十～八十歳の高齢者がメインである。口屋あかがねの会は、団塊の世代を集め、何かしてみないかというところから始まり、ジオラマを作ることになったので、構成は団塊の世代が中心である。

○ 第三グループ
口屋跡記念公民館だけでなく、他の公民館と交流をしながら事業を進めていく、そういうつながりをつくるということが大切だという意見が出た。地域の中で自分たちの住んでいる所の伝統あるいは歴史について、継続して残していく。しかも、高齢者や団塊の世代、小中学生を巻き込み、年齢層を超えて継続的に繋げていく事業は大切だと感じた。また、小中学生が、資料（パンフレット）を活用して体験学習を行っていることから、資料を活かした授業が成されていると思った。そして、地元の様々な歴史をどう残し、継続して地域の人に伝え、それを子どもたちの世代に残していくか、それができるのは、やはり公民館ではないかと感じた。

○ 第六グループ
熱心に地元の良さを見つけ出して後世に伝えようと努力されていると感じた。何もない町は絶対にないということで、自分の地

域の魅力をいかに見つけられるかということが大切になってくるのではないかと感じた。

○　第九グループ

別子銅山という歴史を用いた取組をされていて、子どもたちの意識の中に地元の歴史に深く根ざし、地域への思いや故郷を愛する心を育てるということを実施されており、参考になった。また、子どもたちが大きくなり、持続可能なまちづくりの担い手になっていくということが大切なのではないかという意見が出た。私事ではあるが、双海町は夕日という資源があり、観光等の資源として活用はしているが、今後、子どもたちに夕日の歴史を伝える等の活動を行い、地域への思いや故郷を愛する心を育てていけたらと思った。

6　指導・助言

○松野町目黒地区公民館　館長　岡部　暢雄

口屋跡記念公民館は、歴史や文化を後世に伝えるだけでなく、地域住民の地区愛を育み、地域の発展に繋がる重要なものであると感じた。特に別子銅山を地元の小学生に知ってもらい、地域の特色や愛着心を深め、将来の継続及び発展を目標としていることは素晴らしいと感じた。口屋あかがねの会、くちやあゆみの会が行っている散策マップやジオラマは素晴らしい取組でとても参考になった。私たちの町ではウォーキングマップを作成しており、観光や健康づくりを目的として活用し、高齢者の散策などで利用されている。また、小学校の閉校に伴い卒業生の写真を体育館に展示し、卒業生が過去を懐かしむことができる校舎にしているが、あまり閉校となった校舎の有効利用ができていないことから、大変素晴らしい取り組みだと感じた。

評価について、評価委員会を設置しているということで、とても素晴らしい取組だと思う。評価委員の意見を反映できれば、より良い公民館活動になるのではないかと思った。今後とも評価委員会における意見を反映し、参加者が有意義に思える活動を推進していただきたい。

分科会Ｄ「学校との連携・協働」

1　発表要旨

○松前町東公民館　主事　東山　伸也

「学校・家庭・地域で心豊かなたくましい子どもを育てよう」

1　松前町の概要

2　松前町東公民館の特徴

3　取組事例

(1)　放課後子ども教室

(2)　北伊予小学校五年生「なるほど！米づくり」のサポート

4　成果と課題

2　質疑応答・グループ協議

Q　第一グループ

松前町東公民館の放課後子ども教室について

予算は、どれくらいあるのか。公民館の立ち位置とかかわり方を教えてもらいたい。

A　事例発表者

消耗品・安全管理・学習支援の報償費も含めて二十六万円。県の補助金が三分の二。公民館の立ち位置は、事務局。

Q　司会者

学校との連携・協働というテーマで行っているが、先生の協力が少ないとか、先生の負担が増えるのではないかというところが気になるが。

A　事例発表者

北伊予小学校の校長・教頭が大変協力的である。北伊予校区は人口七千五百人、世帯数が三百二十世帯と多いが、昔から協力的な方が多い。北伊予校区は校長・教頭・先生・地域が皆一丸となって取り組んでいる。

○　第二グループ

公民館と学校の行事としては、夏祭り、昔遊び、七草、餅つき、しめ縄などがある。しめ縄や餅つきは、婦人会や敬老会と連携しているが高齢化が進んでいる。

海上保安庁の協力を得て海上保安パレードを行っているところ

もあるが、トラブルや不安があるので、学校の先生にも積極的に参加していただき、公民館行事を一緒に行ってもらいたい。
行事の送迎バスについて、県内だと公用バスを使用して行けるところもあるが、県外だとそれが難しく困っている。

○　第五グループ
松前町と違う取組があるかという話し合いをした。
新居浜市では少年式のときにハグ山に登っていろいろな体験活動を行っている。
今治市では伝統行事として鮎の放流・つかみ取りをしている。
愛南町では光っ子モーニング事業を行っている。これは食材を地域の人に寄贈していただき、地域の方が朝食を作り、希望する子どもたちに食べてもらう事業である。また、防災訓練も行っている。もともと中学校の主催で始まった行事だが、だんだん活動が大きくなり、今では地区と公民館の共催となっている。
西条市には中学生を対象にした地域未来塾がある。学習支援だけでは子どもが集まらないので、子どもたちの興味を引くような内容を盛り込むなどの工夫をしている。
学校の先生の協力がどうしても必要になってくるが、働き方改革の影響もあり、難しい。

○　第八グループ
地区ごとに、子ども教室や公民館行事を行っているところもある。コミュニティ・スクールを導入しているところがあり、子ども教室のお手伝いをしてもらっている。元先生や教員資格を持っている人にお願いし、子どもの宿題を見たり、遊んでもらったりしている。中には夏休みに中学生が、小学生の宿題を見たり、子ども同士で勉強を教え合ったりしているところもある。
元先生・ボランティアの高齢化によって、継続できず、だんだんと縮小しているところがあるという共通の問題点があった。また、行事に参加する子どもが毎回ほとんど同じなので、もっといろいろな子どもに参加してもらえるように、模索している。

○　松前町東公民館　館長　栗田　眞吾
前年久万高原町での県大会の全体会で発表された、新居浜市立金栄公民館で主事をしていた國光梢さんが「公民館の運営事業は、名も無き家事と同じだ。手を加える事も、抜く事もできる」と言っていた。
四月に公民館館長を拝命。その時に主事と「手を抜く事だけはやめよう。どんなに失敗しても良いから、一生懸命やろう」と話し合った。
二年目に入ったときにハロウィンパーティーを新規事業で主事が立ち上げたが、國光さんが、発表の時に、「何か事業をやるときには、地域を巻き込んでください」と言っていたのを思い出し、このハロウィンパーティーも二時間くらいやってお茶を濁したら良いかと思っていたが、それでは名前負けするのではないかということで、十時～十五時までに延長した。そうすると、何か食べ物を提供しないといけないので、保健栄養グループにお願いした。子どもが安全に集まるために交通安全協会の方に協力してもらった。地域全体を巻き込むには区長会に声をかけなければいけない。更生保護の婦人会等の代表に集まってもらい実行委員会を三回行って、はじめて実施することができた。
ボランティアには、高校生のスタッフが必要だが、地元に居る高校生とつながる窓口が分からない。そこで、昨年子ども食堂を開催し運営した社会福祉協議会に投げかけたら、担当の先生を紹介してもらえた。そして三十五名の高校生が力を貸してくれた。地元松前町の社会福祉協議会のおかげである。当然、実行委員会にも入ってもらった。そういった形で地域の方を巻き込んで実行することが出来た。それが出来たのは、昨年の「地域を巻き込んでください」という言葉だった。

3　発表要旨

○伊方町中央公民館　主査　山田　りか
「学校・家庭・地域と連携した青少年の体験活動の推進」
1　伊方町の概要
2　中央公民館の概要
3　事例紹介
(1)　通学合宿

(2) 子ども球技大会
(3) 子どもスキー教室
4 今後の課題・おわりに

4 質疑応答・グループ協議

Q 第一グループ
伊方町中央公民館の通学合宿について、予算や会費はどうなっているか。米一合など何か持って来るのか。また、地域各種団体の通学合宿への関わり方、食事指導、誰が泊まるのか、などを教えてもらいたい。

A 事例発表者
予算は一人一日五百円、三日間なので千五百円×人数分となっている。足りない分は、町の予算から捻出している。
保護者と公民館と学校の連携で行っているので、地域の方たちには入っていただいてない。
食事はお母さんがメインで、泊まるのは男性保護者。職員は泊まっていないが、何かあった時には保護者から公民館・学校、病気は病院へ連絡できるように連携を取っている。

○ 第四グループ
各地区、「公民館単独で小中学生を対象とする事業は難しいのでは？」という意見が出たので、各公民館で行っている事業をまとめた。
各公民館では、少年式で青年の主張や運動会、公民館祭りなどを実施している。青年の主張では発表の協力、運動会や公民館祭りでは高齢者との交流ができている。

○ 第七グループ
私たちのグループは、学校との連携・協働が本当に必要なのか？という事を話し合った。
地域で子ども教室として子どもたちを受け入れている以上は、地域で責任を持って取り組むという思いがあるので、先生には活動を知ってもらうだけでもかかわりは十分できている。もちろん、学校の力が必要な部分はある。児童クラブの子どもの受け入れの時など、学校に児童クラブがある場合には学校に子どもたちを帰らせないといけない。また、特別な支援が必要な子どもが年々増えている状況の中で、子ども教室で体験活動を行うにあたって、スタートラインに立てない、スタートしたくても子どもがいろいろ動いて大変ということもある。そういったところで専門的な対応をするために、学校側との連携が必要になる。
子どもの育成は、子ども教室や地域だけでは難しいので、家庭や学校の協力も必要である。みんなが一体となって取り組むことが必要である。

5 指導・助言

○助言者 八幡浜市立白浜地区公民館 館長 中島 和久
松前町東公民館の取組について、町中の公民館としてよく頑張っている。新しい行動・新しい団体との連携は、目を見張るべき物があると感心した。特にハロウィンや親子お絵かき等、一つ一つ思いついても実現するのは難しい。技と知恵と行動力がないとそれらの行事は実現できない。そこに、人脈・コミュニティ等が積み重なって、一つの大きい行事が完成されるのだと思う。
自分のところも、学校との連携で学校の運営委員会に公民館長が入り、反対に公民館の運営委員会には学校の校長先生に入ってもらっている。表面上の連携は出来ているが、実際一つの行事にどこまで連携を取り合えるかというのは、一つ一つの行事を大切に、テイクアンドテイクするほかないと思う。
やはり公民館というのは、いろいろな各種団体や役員さんの協力なしでは運営できないので、皆さんの持っている力や知恵を出し合いながら、皆さんが自分の考えを発表できるような雰囲気をつくっていくと、少しずつ思いが実につながるのではないかと思っている。
伊方町は運営についてもいろいろな苦労があるのではないかと、推察する。発表にあったように、超高齢化で高齢化率が五十パーセントになろうとしているような限界集落をたくさん抱えている。他の公民館の方も伊方だけの問題ではない。いずれは皆がたどる道だということも思いながら、公民館活動に取り組み、いろいろな地域の実態に即した活動をしていただきたいと思っている。
今回、分科会形式でそれぞれ少人数での話し合いがあって、大勢

の人前では、なかなか発言できない方も、それぞれグループの中で名刺や情報の交換をして、仲良くなり、分からない事や活動のアイデア等を聞き合うなど、少しでもスキルアップすることができたのではないか。

事例発表やグループでの話合いで、それぞれの実態が聞けたことは、これからの公民館活動への参考となる分科会になったのではないかと思う。

来年は、これがもっと大きな規模になるのではないだろうか。来年度の全国公民館研究集会では、他県の状況を身近なところで聞くことができるので、いろいろ成果もでるのではないかと、私も期待している。

分科会E「人権意識を育てる公民館活動」

1　発表要旨

○西条市　三芳公民館　館長　寺町　恭三

「三芳地区人権・同和教育学習会の取組について」

1　三芳地区の概要

2　地域住民の学習の場の提供

(1)　人権・同和教育学習会の趣旨

(2)　学習テーマ

(3)　学習会の内容

3　地域住民への啓発

(1)　西条市発行の「人権チラシ」の活用

(2)　三芳地区文化祭での人権作品展示

(3)　身元調査お断り運動のステッカーの活用

(4)　人権・同和教育に関する各種学習会への住民参加依頼

(5)　職員の研修

(6)　地域間での交流

4　今後の三芳地区人権・同和教育学習会について

(1)　学校、地域の連携

(2)　近隣公民館との連携

2　質疑応答・グループ協議

Q　第四グループ

三芳地区ではグループ討議を行っているとのことだが、具体的なテーマや内容で意見交換が行えているか。また、講師はどのような基準で探しているか。

A　西条市　三芳公民館　館長　寺町　恭三

テーマの一例としては「地域力の減少」など。内容についてはＤＶＤの要点をまとめた資料を事前に参加者に渡し、各場面でどう思ったか自分の意見を書いてもらい、その後の話し合いに活用してもらっている。しかし、アンケートには、それをするならもう一度ＤＶＤを視聴し、二回目の視聴の際に各場面で停止して話し合えば学習効果が上がるのではないかという意見があった。時間の都合もあるが今後の参考にしたい。

講師については市の人権擁護課に聞いたり、各公民館だよりを参考にしたりしている。

Q　第九グループ

三芳公民館では参加率が三年連続四十七％とお聞きした。私のところも五十％超えている。しかし参加者が固定化されているようにも感じている。他の地区はどのような参加状況か。

A　西条市丹原公民館　館長　野口　一

丹原地区は集落単位で八地区回っている。参加者としてはＰＴＡ、婦人会、老人クラブ、自治会の役員などが多い。参加団体は毎年同じだが、ＰＴＡ、婦人会は年代が変わっていくため人は入れ替わっている。今後、もっと人を集める方法を考えなくてはならない。

A　助言者　天満公民館　館長　秦　英治郎

参加者の固定化はどうしてもあるかと思う。また全体的に呼びかけても限界がある。ある程度、動員をかけないと人が集まらない。しかし、地区団体も近年なくなりつつある。公民館としてできるのは利用者に声をかけることではないか。地区内の声掛けが大事と思っている。

○　第七グループ

東予地区では三～四名のグループを六組作って一年間で二十地

区回っている。今治の波方地区では月一回、人権の研修をしている。それ以外は一年に一回研修をする程度。

○　第四グループ

西条市などでも人権学習を行っているが、地域で温度差があり、三芳地区のように熱心にされているところもあればそうでないところもある。人権学習会を開催することが目的になってきている。

○　第六グループ

今治市では講師を派遣して座学中心に人権学習を行っている。しかし他地区の班員の意見を聞いていると、そのやり方のほうがいいとも思えてくる。様々な意見を取り入れたハイブリットな方法や最新型の方法も取り入れたい。

3　発表要旨

○久万高原町公民館　西谷分館　分館長　山本　眞人

「公民館と学校が共同で行う人権啓発活動」

1　久万高原町の概要

2　西谷分館（柳谷地区）の概要

3　柳谷地区での取組

4　人権啓発活動の取組

5　平成二十九年度の取組

6　おわりに

4　質疑応答・グループ協議

Q　第六グループ

企業への研修などはどうなっているのか。

A　久万高原町公民館　西谷分館　分館長　山本　眞人

開催が土曜なのでなかなか参加を呼びかけづらい。企業の数自体も少ない。老人クラブ、民生委員などには直接書類を出して呼びかけるようにしてできるだけ多くの方に参加いただけるようにしている。

Q　西条市丹原公民館　館長　野口　一

柳谷小学校区運営委員会は公民館運営審議会のような位置づけか。

A　久万高原町公民館　西谷分館　分館長　山本　眞人

別の組織となる。

○　第九グループ

啓発活動は地区ごとの実情を踏まえたうえで行うことが重要。情報収集も大事。自分だけの価値観で人権意識を考えると視野が狭くなる。いろいろな個人や団体と活動していくことが大事だと感じた。人権問題は難しいところもあるが、話し合いの中から新しいことを見つけて前向きに活動を進めていくことが重要。

○　第三グループ

地域によって状況が違う。学校と一緒に人権学習を行っているところもあれば合併や統合で学校がないところもある。そのような地域では公民館を中心に人権学習を行っている。

○　第六グループ

子どもを対象にすると保護者も参加してくれる。

○　第一グループ

発表にあったように意見交換や情報提供の場は重要だと感じた。人口が減少し続ける中で活動も減少している。

5　指導・助言

○四国中央市　天満公民館　館長　秦　英治郎

西条市三芳地区寺町館長、そして久万高原町柳谷地区山本館長から発表していただいた。両地区とも工夫しながら学習会をされているのだなと思いながら聞かせていただいた。

まず、西条市三芳地区の取組について、毎年七月に二日間開催されていること、参加者が百名以上ということから地区住民の差別解消への意識の高さと強い思いが感じられた。また、テーマ等についても、毎回様々な関係者と十分に協議し準備をしていることから良い成果につながっているのだと思う。

特に、今年度のテーマ「無縁社会と家族～生きること　つながること～」まさに現代社会の一番の課題をテーマにし、身近に起きる問題を考え、話合いを行ったことは非常によい。私たちも他の地域を参考にしたいと思う。そして、啓発活動や研修への参加、地域間での交流など積極的に取り組みながら、先のこともしっかり考えており、素晴らしいと思った。これからも頑張ってほしい。

次に、久万高原町柳谷地区の取組について、過疎化、高齢化が進み人口の少ない地区での人権啓発活動は、参加者の確保等で苦労されていることと思う。そんな中、小学校と共に取り組まれ、通常は授業参観のみで終わってしまうところを、子どもたちの学びを見てから自分自身の問題として捉え、そこから一歩踏み出して意見交換をされていること、大変いいやり方をされていると思う。また、今回の取組から見えてきた課題もしっかりと捉えているようなので、様々な問題を地域全体のこととして考え、今後とも活動を継続させてほしい。

二地区の発表に対する、私の感想は以上で、ここからは四国中央市の取組や公民館として出来ることなど、私の考えや思いを話したい。

四国中央市人権教育協議会（社会教育部会）としては、毎年度様々な活動を実施しているが、その中で市の研究大会では「差別の現実から深く学び、あらゆる人権問題を解決するにはどのような実践活動を展開すればよいか」を主題として、毎回二団体から活動報告をしている。今年度は「朝日文化会館での活発な事業展開の様子」と「四国中央市子ども食堂の取り組み」についての二件、昨年度は「差別の現実に学ぶ～母、そして祖母として～」「合理的配慮を考える～私らしく当たり前に生きていける社会～」という、自分自身の経験から得たものを発表してもらった。このように私たちの周りにある問題や課題を主題にすることで、それぞれが何をすべきかに気づき、問題解決に向かっての行動につながっていくと思う。

次に、ケーブルテレビを活用しての教育と啓発について、平成二十九年度から始め、人権劇の放送や人権をテーマにした俳句、川柳、標語を小学生から一般市民に募集し、作者の伝えたい思いを解説ナレーションとして加え、市内の風景、景色を背景にして放送している。また番組はＤＶＤにして、公民館等での人権教育に使用している。

このように市民参加型の手法を取り入れながら、新しい人権・同和教育のスタイルを構築している。研究大会参加者や市民からは、身近な問題として捉えられ分かりやすくていいと好評を得ている。

次にこの分科会のテーマ「人権意識を育てる公民館活動」について、少子高齢化、人口減少、地域の希薄化は、どこにでもある問題である。そこで、これからの地域社会をどのように守り、活性化していくべきかが、公民館として取り組まなければならない課題だと思う。

今、コミュニティ活性化、コミュニティ・スクールなどの取組が始まっており、既に実施している、公民館祭、スポーツ大会など地域の年間事業、公民館でのサークル活動が多くあると思う。それらの事業、活動への参加者、協力者を増やすことが地域の活性化へとつながる。声掛けとお願い、そして、興味を持ってもらえるアイデア、参加しやすい環境づくり、楽しくやり甲斐を感じてもらう工夫などを考えるのが公民館職員の使命ではないか。

参加者が増えればますます人がつながり、交流と付き合いが広まり、そして友情と絆が深まっていけば互いに思いやり、優しい気持ちをもった人々が増え、差別のない地域社会が創生されていく。

最後に、今一度自分たちの公民館地区を見つめ直してほしい。

・　悪い風習、間違った考えは残っていないか。もしあるのならば、無くそう。

・　物を計る道具はあるが、人の価値を計る道具は無い。

・　学習することは大事であるが、学んだことを活かす努力はもっと大事である。

・　行政職員や教職員は在職中、多くのことを学び伝えてきたが、退職すると人権・同和教育から離れて行く人もいるように思う。長年かけて学んだことを、もっともっと多くの人に伝えていってほしい。

子どもたちに何を伝え残して行くべきか。そしてこれからの地域をどう守り活性化させて行けばいいか。目標と夢を持って皆さんと共にこれからも頑張っていきたいと思う。

県公連だより

令和元年度　愛媛県公民館連合会総会

五月十六日（木）、県生涯学習センターにおいて、令和元年度総会を開催しました。

永原会長の開会挨拶に続いて、三好愛媛県教育委員会教育長からご祝辞をいただいた後、議事に入りました。「平成三十年度事業報告及び一般会計歳入歳出決算」、「令和元年度基本方針及び事業計画（案）」、「令和元年度一般会計歳入歳出予算（案）」、「令和元年度郡市公連会費分担金（案）」等について、審議が行われ原案どおり可決されました。

また、任期満了に伴う役員の選任が行われ、重信会長ほか、副会長二名、理事七名（うち一名は五月三十一日開催の県公連主事部会会議において選任される県公連主事部会長）、監事二名が選任され、新体制がスタートしました。

令和元年度　郡市公連事務局長会

五月十六日（木）、県生涯学習センターにおいて開催しました。県公連事務局からの依頼事項及び事務連絡を行うとともに、県公連運営に係る意見交換等を行いました。

令和元年度　県公連第一回理事会

五月十六日（木）、県生涯学習センターにおいて開催しました。

「令和元年度県公連事業実施計画」のほか、「令和元年度愛媛県公民館研究大会」、「第四十一回全国公民館研究集会徳島県大会」、「第四十二回全国公民館研究集会愛媛県大会の概要」、「県公連専門委員会委員・顧問の承認」等について協議を行いました。

令和元年度　県公連主事部会会議

五月三十一日（金）、県生涯学習センターにおいて開催しました。

任期満了に伴う役員選任を行った後、伊予地区で開催する「主事部会・公民館職員等合同一泊研修会」の実施内容や、次年度の開催地（南予地区）の協議のほか、主事部会「研究・研修会」の実施内容について意見交換を行いました。

令和元年度　公民館新任職員ネットワークセミナー

六月十三日（木）・十四日（金）の二日間、愛媛県身体障がい者福祉センター及び道後友輪荘において、四十五名の公民館新任職員が参加しました。生涯学習・社会教育の基礎的な講話をはじめ、レクリエーションの体験、先輩主事とのグループ討議、公民館における人権・同和教育に関する講話や先進的な実践事例等を二日間にわたって学び、公民館新任職員の資質能力の向上に努めました。

令和元年度　公民館新任館長研修会

六月二十日（木）、県生涯学習センターにおいて、新任館長を対象に開催しました。

五十二名の新任館長が参加し、公民館制度や人権・同和教育についての講話や、「地域づくりと公民館活動」をテーマとした講話を受講し、公民館活動に資する知識の習得に努めました。

令和元年度　県公連主事部会・公民館職員等合同一泊研修会

七月四日（木）・五日（金）の二日間、ウェルピア伊予等において、「地域づくりと公民館活動」をテーマに研修会を開催しました。

研修会には二十七名の公民館主事等が参加し、初日は、坂村真民記念館を見学した後、松前町国体記念ホッケー公園において、松前町の地域スポーツであるホッケー競技を体験しました。二日目は、ウェルピア伊予において、松前町・伊予市・砥部町の公民館主事による事例発表・質疑応答を行い、伊予地区の公民館の取組みや活動を学びました。

令和元年度　県公連第二回理事会

七月十八日（木）、松山市中央公民館において開催しました。

「県公連会長表彰・感謝状贈呈候補者の選考」のほか、「令和元年度県公民館研究大会の運営」、「第四十二回全国公民館研究集会愛媛県大会の県実行委員会の設置」等について協議を行いました。

第四十二回全国公民館研究集会愛媛県大会第一回愛媛県実行委員会

七月十八日（木）、松山市中央公民館において開催しました。

「第一回県実行員会立ち上げまでの経過報告」のほか、「第四十二回全国公民館研究集会愛媛県大会開催要項（案）」や「今後のスケジュール」、その他「大会運営の役割分担」等について協議を行いました。

令和元年度　愛媛県図書館講習会

八月七日（水）、県生涯学習センターにおいて、県公民館連合会をはじめ六団体が共催し、図書館業務に係る講習会を開催しました。

公民館職員を含む百四名が参加し、「学校図書館活用の可能性を探る」と題した講話の他、図書館職員等による災害対応を中心とする事例発表があり、図書館業務の知識や技能の習得に努めました。

令和元年度　公民館報コンクール審査会

八月二十二日（木）、県生涯学習センターにおいて開催し、第一部四十点、第二部十八点の応募の中から慎重に審査を行い、入選作品に第一部・第二部ともに七点を選考しました。

十月二十四日西条市での令和元年度県公民館研究大会において、入選作品を顕彰したほか、全ての応募作品を会場内で展示・紹介しました。

第四十一回全国公民館研究集会徳島県大会（第四十一回中国・四国地区公民館研究集会徳島大会）

九月四日（木）・五日（金）の二日間、「アスティとくしま」において、第四十一回全国公民館研究集会が開催され、全体で千百七名、うち、本県からは百八名が参加しました。

研究集会では、「公民館が心豊かな地域を創る～つどい まなび つながる地域社会～」をメインテーマに、一日目は、全国公民館連合会表彰の他、パネルディスカッションや情報交換会、二日目は、「公民館による心豊かな地域づくり」等をテーマとする七つの分科会が行われました。

閉会式において、重信県公連会長が、第四十二回全国公民館研究集会愛媛県大会を松山で開催する旨の次回開催県あいさつを行いました。

令和元年度　愛媛県公民館研究大会

十月二十四日（木）、西条市中央公民館をメイン会場に、四百七十名の参加を得て、「これからの公民館の役割と課題とは」と題して研究大会を開催しました。

表彰等の開会行事、全体会としてインタビュー・ダイアローグを行った後、五会場において、優先度の高いテーマで分科会を開催しました。

詳細については、本号の「令和元年度愛媛県公民館研究大会」をご覧ください。

第四十二回全国公民館研究集会愛媛県大会宿泊斡旋等業務取扱業者選定委員会

十二月十八日（水）、県生涯学習センターで、四名の選考委員により開催しました。

全国集会の宿泊斡旋等の業務を委託する業者を選定する委員会で、応募のあった企画提案書を評価基準に基づき慎重に審査し、取扱業者を選定しました。

令和元年度　県公連専門委員会

令和二年一月十六日（木）、県生涯学習センターにおいて開催しました。

県公連事務局から「令和元年度県公連事業実施状況」、「令和二年度県公連事業実施計画（案）」、「第四十二回全国公民館研究集会愛媛県大会開催要項（案）」について説明を行った後、「県公連が今後十年間で取り組むべき施策」の答申に向けて、委員と理事者との間で自由な意見交換を行いました。

令和元年度　県公連第三回理事会

一月二十三日（木）、松山市中央公民館において開催しました。

「令和元年度事業実施状況」、「令和元年度一般会計歳入歳出決算見込み」により、本年度事業が計画どおり進捗していることを確認するとともに、「令和二年度事業計画（案）」等を協議しました。

また、第四十二回全国公民館研究集会愛媛県大会における「インタビュー・ダイアローグの登壇者（案）」、「分科会の県内事例発表（案）」のほか、「分科会運営担当公連・協力公連（案）」等について協議を行いました。

令和元年度　郡市公連会長・事務局長研修会

一月二十三日（木）、松山市中央公民館において開催しました。

三十二名が参加したこの研修会では、「公民館の現状と課題」をテーマとした講話の後、「令和元年度県公連事業実施状況」、「令和二年度事業実施計画（案）」、「郡市公連会費分担金（案）」、「第四十二回全国公民館研究集会愛媛県大会開催要項（案）」等について県公連事務局から説明し、第三回理事会で承認された、全国集会の分科会運営担当公連・協力公連について報告し、協力を依頼しました。

その他、県公連の運営に関する質疑応答や意見交換を行いました。

第四十二回全国公民館研究集会愛媛県大会第二回愛媛県実行委員会

一月二十三日（木）、松山市中央公民館において開催しました。

現在までの進捗状況を説明した後、「第四十二回全国公民館研究集会愛媛県大会開催要項（案）」、「インタビュー・ダイアローグ登壇者等の候補（案）」、「分科会の日程等（案）」、「大会収支予算（案）」、「大会宣言（案）」、「今後のスケジュール」について協議を行いました。

令和元年度　県公連主事部会「研究・研修会」

二月十二日（水）、県生涯学習センターにおいて開催し、十六名の公民館職員が参加しました。

愛媛新聞社の協力を得て、『どう魅せる？どう伝える？公民館報作成スキルアップ講座』と題して、館報作成の基礎知識や見出しの付け方・レイアウト等の手法を学んだ後、フリーソフトを使い、紙面作りを実践しました。

実務経験豊富な講師の個別指導を受けながら、公民館報作成の知識や技能を習得する実践訓練を行いました。

編集後記

◎　令和になって初の発刊となる「伊予路」第百五十六号をお届けします。

　執筆者を始め、多くの方々にご投稿・ご協力いただき、感謝申し上げます。

◎　本年度も、全国各地で台風や大雨等の自然災害が発生しました。

　県内でも、多くの公民館が避難所に指定されており、避難所の開設から運営に至るご労苦いかばかりかと拝察申し上げる次第です。

◎　さて、県公連の本年度最重要事業であります「県公民館研究大会」では、西条市公連・西条市教委の皆様に格別のご協力・ご高配を賜りましたこと、心からお礼申し上げます。

　今回の県公民館研究大会は、来年度開催する第四十二回全国公民館研究集会愛媛県大会兼第四十二回中国・四国地区公民館研究集会愛媛大会（以下「全国集会」という。）のプレ大会と位置付け、全国集会のより効果的な運営に向け、実験的な取組みにも挑戦しました。その結果を見極めながら、全国集会の運営に生かしてまいりたいと考えています。

◎　また、本号「県公連だより」の項で記したとおり、本年度の県公連事業の実施と並行し、全国集会開催に向け昨年七月には愛媛県実行委員会を立ち上げ、決定された各種の事項や方向性に沿って実務的な諸準備を進めているところです。

◎　これまでに、限られた予算の下で、県民文化会館をはじめ分科会場の会館等との折衝、予報（チラシ）の作成・配付、司会者・アトラクション出演者との交渉、宿泊斡旋等の業務を委託する業者の選定等を行ってきました。

　とりわけ、時間と労力を要したのが、松山市内・道後地区での駐車場の確保と警察との協議です。現計画は想定台数を基礎としていますが、実台数が確定していく段階で、参加される方々にとって更に利便性の高い対応へと微修正してまいりたいと考えています。

◎　事程左様に今年度多くの時間をかけて準備作業を進めてきましたが、この間大いに参考としたのは、かつて県教委時代に主催した「全国学校保健・安全研究大会」です。

　今後とも、当該研究大会のノウハウ等を応用するとともに、県庁在任中に築いた警察・消防を始めとする各種関係機関・団体等との人的ネットワークを駆使しながら、全国集会運営の骨格をしっかり作り込んでまいります。

◎　しかしながら、全国集会を真に成功に導き、参加する方々にとってより効果的で意義あるものとするためには、県内すべての公民館関係者が来県される方々を温かくお迎えするとともに、参加者が協力しながら主体的に学びを深め、より多くの方々と意見交換・交流することが、なにより重要なことであると考えています。

　そのためにも、どうか県内の郡市公連、各公民館、そしてすべての公民館関係者が、気持ちを一つにし、ワン・チームとして全国集会の運営にご参画くださいますよう、よろしくお願いします。

（近藤正典）

愛媛県公民館連合会機関誌
伊予路　第一五六号
発行　愛媛県公民館連合会
松山市上野町甲六五〇
愛媛県生涯学習センター内
発行年月日　令和二年三月二十三日
印刷　三創印刷株式会社
☎〇八九－九三三－〇二六八

公益社団法人　全国公民館連合会

2020年度（2020年5月1日午後4時～2021年5月1日午後4時）

公民館総合補償制度

本制度は、公益社団法人全国公民館連合会（全公連）の制度です。市町村の公民館および自治公民館、また公民館に準ずるものとして全公連が加入を認めたその他の施設等は、名称を問わずご加入いただけます。指定管理者制度を導入された施設もご加入いただけます。

3つの補償で公民館活動をサポート

1. 行事傷害補償

【災害補償保険（公民館災害補償特約、熱中症危険補償特約）+見舞金制度】

保　険

- ■公民館行事参加者のケガを補償
- ■公民館利用者のケガを補償
- ■行事往復途上のケガを補償
- ■行事の事前練習や事前準備、後片付けでのケガを補償
- ■食中毒や熱中症を補償

見舞金制度

- ●疾病や特定傷害に、疾病死亡弔慰金、疾病入院見舞金をお支払いします。
- ●特定災害による損害に、特定災害見舞金をお支払いします。

【補償例】

●バレーボール大会参加者が転倒して負傷。

2. 賠償責任補償

【賠償責任保険（施設所有管理者特約、昇降機特約）】

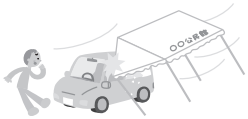
保　険

- ■公民館の施設・設備等*の欠陥や業務運営のミスにより、第三者にケガをさせたり、財物を損壊したことにより、公民館が法律上の賠償責任を負担しなければならない場合に補償

※公民館が所有、使用または管理する財物への賠償事故などは対象になりません。

＊施設にある昇降機（エレベーター、エスカレーター）の所有、使用、管理に起因する賠償責任も含みます。

【補償例】



●テントの張り方が悪く風で飛ばされ、行事来場者の車を破損。

3. 職員災害補償

【普通傷害保険（就業中のみの危険補償特約）+見舞金制度】

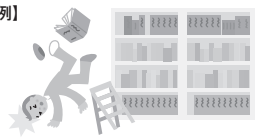
保　険

- ■公民館事業や業務に携わる方の公民館業務中のケガを補償

見舞金制度

- ●公民館事業や業務に携わる方の病気や特定傷害、業務外のケガ、業務中の地震によるケガに死亡弔慰金や入院見舞金をお支払いします。

【補償例】



●職員が業務中に脚立から転落して負傷。

公民館総合補償制度の特長

（1）補償範囲や対象者が広い、公民館専用の制度です。

●全公連が運営する『見舞金制度』に『保険』を組み合わせた公民館や類似公民館の専用の制度で、安心して公民館活動を行っていただけるよう幅広い補償になっています。

★行事傷害補償制度のここがおすすめ★

- ■日本国内であれば行事の場所は問いません。　※別に定める危険な運動中等は対象外です。
- ■行事参加者や利用者の居住地は問いません。
- ■公民館公認のサークル活動参加者や有償・無償を問わず公民館ボランティアや講師も補償します。
- ■公民館が他の団体等の行事に派遣する行事の参加者も補償します。
- ■宿泊をともなう行事も対象です。

（2）年1回の手続きで安心です。

●年1回の手続きで年間の主催、共催行事が対象になり、個別の行事の通知は不要です。うっかりして保険の手配を忘れる心配がありません。

（3）掛金の割引制度もあります。

●同一市町村内で10館以上まとめて加入されると、行事傷害補償の保険料と見舞金制度掛金に割引が適用できます。

●職員災害補償の保険料には、団体割引25%、過去の損害率による割引20%を適用しています。

このご案内は、本制度の概要を説明したものです。詳しい内容につきましては『2020年度版マニュアル 公民館総合補償制度の手引き』をご覧ください。
また、本制度全般のお問い合わせ、資料請求等は、エコー総合補償サービスまたは損保ジャパン日本興亜までお寄せください。

■引受保険会社

損害保険ジャパン日本興亜株式会社

営業開発部第三課
〒160-8338 東京都新宿区西新宿1-26-1
TEL 03-3349-3820　FAX 03-6388-0157
（受付時間：9:00～17:00）
損害保険ジャパン日本興亜株式会社は関係当局の認可等を前提として2020年4月1日に商号を変更し「損害保険ジャパン株式会社」になります。

■取扱代理店（お問い合わせ・資料請求先）

エコー総合補償サービス株式会社

〒101-0047 東京都千代田区内神田2-6-9
TEL：0120-636-717（通話料無料）
FAX：0120-226-916（通話料無料）

（SJNK19-11289）作成日 2019年12月20日［1912K-㉑］